
霧の先は異世界！

紅姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霧の先は異世界！

【Nコード】

N7756T

【作者名】

紅姫

【あらすじ】

生まれは日本、育ちも日本の枝流^{えりゅうと}勇人は一族代々有名な精霊使いの家系。霊視の力はあったが一切その力が目覚める事はなく一般人として大学に通っていた。先輩の愛奈によって富士山を登ってる途中に霧に包まれてしまい・・・

始まりのエピソード

世界は、不思議な現象や現代科学ではとうてい説明のつかない多くのモノが溢れている。

ロストテクノロジー
遺失技術を応用した技術でOS市場の独占市場を1年で塗り替えた企業、フォーチュンテラー・インダストリー。

える
枝流^{ゆる}勇人は、エージェントとして所属している。

フォーチュンテラー・インダストリーと敵対するようにロストテクノロジー遺失技術を収集してる組織として^{ミュージアム}博物館がある。

プロメテウス
勇人はアメリカの軍事衛星から極秘ルートで一週間前に手に入れたタクラマカンの砂漠にある遺跡の衛星写真を社長から渡されて任務を受けた。

ローラン
その任務と言うのは、かつて楼蘭に存在したと言う、古代の至宝刀『破山剣』を手に入れるという事である。

破山剣それは、山ですら断ち切ると言われるほどの神剣であり、中国の伝承にのみ語り継がれている。

時の皇帝が不老不死を手に入れようと画策した際に探し出そうと全力を注いだが見つけることが出来ず、たった一本の刀を探すだけで国が滅んだまでとされる物である。

「ちっ、こんな所で^{ミュージアム}博物館と会うとはな・・・」

黒の密着した服を着ている勇人は舌打ちしながら中国のタクラマカン砂漠にある遺跡の階段を飛ぶような速度で走っている。
通り過ぎた場所の石畳にはナイフが柄まで突き刺さる。

「ハーズィ、相手はDADDYFACEの草刈鷲士と同じ体術を扱
う九頭竜の化け物だ。遊んでる暇があるならそのナイフで奴の着て
いる服を切り裂いて殺せ」

「分かってるよ、バスカル」

バスカルと呼ばれた男は黄色の虎のような顔をしており、ハーズィ
と言われた男はピエロのような格好の男だった。

ハーズィがバスカルへ勇人を挟撃するように手で合図をすると二人
は分かれた。

二人が話してる隙に男、枝流勇人は二人からの距離を取っていた。

「一人は超震動ナイフか、もう一人の能力は不明だな」

勇人は、亡霊を使いつつ、普通の人間ではありえない体捌きで移動
していく。

ん？二人が離れた？

九頭竜というのは、人間の持つ潜在意識下の全ての力を自分自身で
行使することが出来る、その支配権は体細胞の1つ1つまで及ぶ。
それにより普通の人間を遥かに凌駕する身体能力を有する。

勇人は気配から能力が唯一分かっているピエロ姿の気配の方へ近づ
く。

そして柱にむけて、力を溜めた拳《九頭・右竜徹陣》を打ち付ける。
粉碎された石で作られた直径1mの柱が碎け散り、散弾銃のような
破片がハーズィに向かって飛来する。

突然、目の前の柱が粉碎され飛んできた破片がハーズィに刺さり、
体中に傷を負わせる。

破壊音に気づいたバスカルは、自分達の挟撃の失敗を悟りハーズイの元へ走り出す。

だが、すでに勇人は瀕死のハーズイを《九頭・右竜翔扇》で空中に吹飛ばし落ちてきたハーズイに向って全力の九頭・右竜徹陣》を打ち込む。

ハーズイは地面に平行に吹き飛び、何本もの神殿を支える柱を壊して巻き込みながら最後に倒れてきた柱に下敷きにされ息絶えた。

バスカルがその直後、勇人へ向って背中から鋭い爪を振り下ろした。その爪は黒い勇人のジャケットを切り裂いたが勇人のスウェットで止まっていた。

「ばかな！」

バスカルが動揺してる所で、勇人が一步踏み込む。踏み込んだ石畳が砕け散る、そして勇人の掌底《九頭・左竜落崩》がバスカルの太股を切断する。そして、バランスを崩したバスカルが驚愕の眼差しのまま体中の生体電流を集めた《九頭・左竜雷掌》がバスカルの脳と体組織を破壊し死に至らしめた。

楼蘭の最深部に続く石畳を進むと四方100mほどの大きな空洞に出た。

そこには金色に輝く台座がありその上に一本の日本刀が安置されていた。

「こんな所に日本刀？」

勇人は、日本刀を両手でもつと右手で柄を持ち抜いた。刃には木目が走っておりダマスカス鋼で作られているのがわかる。

「文献だと石畳でも簡単に切れるはずだったか？」

勇人は何気なく水平に日本刀を振るってみる。同時に降った先にある数十の石の柱が斜めにずれていく。

「え？これが破山剣かよ。」

勇人が振るった剣の衝撃により、楼蘭を支えていた柱が次々と倒壊し砂が地下空洞に流れ込んでくる。

楼蘭の最深部は砂漠の中に埋まっているからだが、勇人は急いで楼蘭の最深部から走って抜け出す。

5分ほど走ると、遺跡の入り口から抜け出ることに成功した。それと同時にタクラマカン砂漠の砂がどっと地下の空洞に流れ込む。

それを勇人は見てる余裕はなかった。

中華人民共和国の兵士が3000人ほど前面に展開していたからだ。勇人は警告すらしてこずに拳銃やマシンガンを撃ち始めた中国の兵士に突っ込んでいく。

撃ち込まれた弾丸を目で捉えながら両手のオレイカルコス製のグローブで弾く。

あまりにも弾数が多いため、弾けない物については、カーボンナノチューブで編まれたスウェットで受け止める。

そして、懐に入ると、体術で中国の兵士を蹂躪していく。

ある者は頸椎を折られ、ある者は体に穴をあけられながら吹き飛ばす、そしてその余波で数人が巻き添えになって死んでいく。

そして。数十人が5mの高さまで次々と吹き飛び落ちてくる、落下により死ぬ者、重症を負う者が出てくる。

中国の兵士は仲間の巻き添えも構わずにマシンガンを連射するが勇

人は全てを避ける。

そして避けた銃弾が同僚であるはずの中国を殺していく。

仲間の凶弾に次々と中国の兵士が生を散らしていく。そして・・・
同士討ちと並外れた体術によりわずか10分で中華人民共和国30
00人の兵士は全てが軀と化していた。

そして、その後、^{ていゆ}勇人を迎えに一機の黒塗りの全長50mのステル
スが上空を旋回していた。

異世界は突然に

大学の登山部主催の富士山頂上めざそうぜ！企画に無理矢理巻き込まれた、枝流勇斗えりゆうとは途方にくれていた。

登るのが辛いというのではない。

5合目から頂上まで上り3時間で往復しようぜ！企画に対してでもない

原因は、登山部でもない勇斗を無理矢理、弱みを突きつけて拉致同然に監禁してきた、水梨愛奈みずなしあいなが原因であつたからだ。．．．

その、弱みというのはこの大学最後の夏休み終りに大学マドンナ的存在の風霧美奈子かざきりみなこに告白しようとしている事が、この愛奈先輩にバレてしまったからだ。

ジャマをされたく無ければ富士山に登る企画来てくれるよね？とそれは、もう本当にいい笑顔で言われた時には殺意が芽生えましたとも。ええー

その愛奈先輩がすでに7合目あたりで

「ゆうとーもう、うごけないー、あしいたいー」

と言ってるじゃないですか

思わず、それは大変ですね、じゃ降りて帰りますか？と言いかけたのはここだけの話にしておきたい。

「ねー、ゆうとー！私ね、すごいいい事思いついちゃたんだ！」

といい笑顔で話しかけてくる。悪い予感しかしませんよ。
仕方なく、ほんとうに仕方なく

「なんですか？先輩？いい事って？」

その時、俺は今日ほど良い事って言った奴の言葉を確かめるのはダメだと次の話を聞いた途端、後悔した。

「うん、私を抱っこして！ゆーとが頂上までいけばいいんだよ！」

と言い切りやがりました。この先輩は………

それでも、話しながら富士山の7合目と8合目の間まで来ていたのは、この我が侂な先輩としては健闘したと言う所だろう。

俺は周囲を8合目に向う先の道を確認しようと思線を見ると、周りにいた登山家は先に進んだのか周囲には誰もいなかった。

周囲は突然発生した霧により少しづつ視界が悪くなってきた。

俺は小さい頃から、『霊視と一般的に呼ばれる力』により、霊や精霊などを視る事が出来る。

その霊視が今周囲に取り巻く現象は自然的な物ではなく、なんらかの力が加えられていると伝えてきている。

富士山は他の山と違い、細かく砕けた岩石により形勢されており夏場だと上るのがとても辛い。

その為、登山をする人を助けるように危険な位置には常にロープが張られていてかなり危険である。

それでも、今の現状は普通ではありえ無い事もあり亡霊ファントムを使い体内のリミッターを解除し、愛奈先輩を抱きかかえ8合目の小屋までの道のりを進んでいく。

かなりの距離を走っていたが、いつの間にか足者が岩石から土に変わっているのに気がついた。

俺は心の中で自分の失策に落ち込んだ。

足元が変わるまで気がつかないとは……………

恐らく、何らかの結界を越えてしまったのだろう。俺の考えを肯定するように霧が晴れていった。

異世界は突然に（後書き）

ご希望・ご要望がありましたらドシドシ書いてください。皆様の
指摘・ご指導をお待ちします

精霊と術

霧が晴れて遠くまで見渡す事ができた。

これで俺がいる位置が確認出来る訳なのだが、回りは木に覆われており、森の中だというのが分かる。

「ねえ、ゆーと。これって一体？」

愛奈先輩が俺に聞いてくるが、俺自身も現状を理解できない。

一つだけ言える事は、先ほどの違和感から感じるにここは、日本でも無ければ地球でも無いという事だろう。

何故かと聞かれれば、霊視の力⇨精霊の力を行使できるという事だが、残念ながら勇人には精霊を浄化し清める事が出来ない。

そのため、精霊からは嫌われており力を行使することができない。

精霊に嫌われる事は、精霊を使役し事象を作り変え、奇跡を起す精霊使いとしては致命的な欠点である。

地球では精霊から寄り付かれる事は無かった。

それがどういう事か、先ほどから数多の精霊が勇人の周りで、戯れるように話しかけるように浮いている。

「愛奈先輩、まだ詳しい事は分からないけど、しばらくは俺の言うとおりにしてくれ」

愛奈自身、頭の回転が悪いと言う訳ではない。

語学にとっても通じており英語とドイツ語を話すことができる。

そして、周りの雰囲気にも敏感に感じ取りそれを利用して友達を作る事も得意な方だった。

私はいつも大学では頼りになくても影のある勇人にどこか惹かれて

いた。その勇人が初めて見せる顔と口調にとても驚いた。不思議な現象の当事者になっているのに冷静に状況を把握して指示を出す事ができるのだから

普段、何に誰に対しても無気力な勇人からは考えられない事。

私は、そこまで考えて、勇人に判断を任せる事にした。

「うん、わかった。言ったとおりにするね」

愛奈から肯定の言葉を聞いた勇人は、周辺に先ほど寄つて来た精霊に対して枝流家の父親に習った術を行使してみる。

俺の本家たる枝流家は代々、関東一円の妖魔を退治し守護してきた四大精霊使いの一角に当たる。

幼少の頃から、術の使い方を死ぬほど教え込まれてきたが、力を使用する才能に恵まれなかった事から無能者のレッテルを貼られた。本家の者が、力を使う事が出来ないその事で、それを理由に分家にもバカにされた。

両親も最初は俺に眼を掛けてくれていたが、俺に才能が無いと分かると弟に掛かりきりになった。

俺は、高校に上がると同時に本家から飛び出し一人で暮らし始めた。それほど本家の無能者に対する扱いは酷かった。

勇人は昔習った術を使い、大気の風を支配下に置く。己の視覚を研ぎ澄まし、風に乗せ広げていく。

しばらくすると、10kmほど離れた所に複数の生き物の気配を感じた。

「愛奈先輩、こちらに少し進みましょうか？」

俺の力は、本来の世界では異端の物であり、一般の人間には恐怖の

対象に映る。

その事から、愛奈先輩には力の事は黙っておく事にした。

愛奈先輩は俺の指した方角へ進むことを了承すると俺の顔を見つめてきた。

俺はその時、初めて気がついた。愛奈先輩の瞳の色が黒から金色に変わっていたからだ。．．．．．

俺は、愛奈先輩の瞳の色に疑問に持ちながらも、生き物の気配を感じた方向へ、獣道のような道を進んだ。

サバイバル1

勇人と愛奈は獣道を歩いていたいだが、少しづつ道が細くなりついに道が無くなっていた。

それでも勇人達の進路が一定の方向を向いているのは風の精霊を使った探知により生命反応を確認出来るからであるが．．．．．

「それにしても暑いな、一体何度あるんだ？しかも見たことの無い植物ばかりだし」

勇人が呟きながら森の中で先頭に進みながら、愛奈が歩きやすいように葉っぱや枝を折っていく。

すでに、勇人達が獣道を歩き出してから30分近くが経過していた。いくら勇人が愛奈が歩きやすく先頭を歩いているとは言え、山の中を歩くのは女性としてはかなりきつい事この上ない。

「ねー、ゆーともう疲れたよー。少し休もうよー」

愛奈が休息を欲しがるのも仕方が無かった。

俺は愛奈先輩の方へ視線を移すと先輩の足は生まれたての小鹿のように震えていた。

流石にこの状態で、先に進むのは危険と判断せざる得ない。疲れるといざと言う時に行動できないと困るからだ。

俺は、仕方なく休息を入れる事にして、先輩へ休憩しましょうと言ってから近くに休憩できる場所があるか風の精霊の力を使い、視覚を四方への伸ばした。

しばらくすると南西500mの位置に川が流れてるのが見えた。

疲れを取る為、それとある程度開けた場所で休んだ方がいいと思い先輩へ水の流れる音がしますと嘘をいい、川の方へ向った。

川へ向かう間も勇人が先頭になり、その後ろを愛奈がついていく。

私はさつき、勇人が水の音がしますからって言われた時にそんな音が一切聞えなかった。

それに、もう山中の獣道をずっと歩いていたら足も痛いし、汗はべとつくし喉も渴いたし最悪な気分だった。

あーもう、富士山なんか来るんじゃないやなかった！ 私は盛大に心の中で突込みつつ、勇人から離れないようにがんばってついていった。しばらく歩くと、森が途切れて川原と川が視界一杯に広がった。

私は、喉が渴いてる事もあって、勇人が何か言っていたのに気がつかず川へ走った。

俺自身、こんなに精霊が使えると便利だとは思わなかった。視界いっぱい広がる川を見るまでは……俺が感激してる間に、愛奈先輩が川へ走って行って止める間も無く川から直に水を飲んで下していた。

「ゆーと、この水すっごい、おいしいよ！」

「先輩、おいしいのは分かりますが、一応何かあったら困るので、これを使ってください。」

一応、この容器の口の部分に濾過するキャップがついてますので、このペットボトルに川の水を入れて、濾過してから飲んでください」

俺は容器を、愛奈先輩に渡してもう少し注意して行動に移してほしいと思っていた。

それに、今までの動作を見てもどう考えても本当に登山の経験があるように見えない。

俺は心の中で溜息をつきながら、自身も容器に水を入れてから濾過して飲んだ。

水を飲んで一息ついた事もあり、登山靴の紐を緩めてから俺と愛奈先輩は川原の大きめの岩の上で寝転ねころがった。

川のせせらぎが耳に心地いい。どのくらいそうしていただろうか。愛奈先輩が座って流れてる川をぼーっと見ていると突然、声を発した。

「ねえ、ゆーと。私達これからどうなっちゃうかな？」

恐らく愛奈先輩本人はかなり落ち着いて話を切り出したと思うが、所々声が震えていた。

俺としてはこんな事は日常茶飯事だった事もあり、気軽に対応する事にした。

「なんかかなると思いますよ。しばらくは・・・」

「え。どうして？食べる物も何もないんだよ？」

3歳年上と言っても所詮は都会育ちだから仕方ないか。山は食料の宝庫たからだと言っのに・・・

枝流家は、幼少のうちから自然界において、生きる術を身につかせるのが慣わしとなっている。

常に悪しき物を滅めする事が慣わしの為、常に死の危険に置かれる。その為、どんな過酷な状況下で生きていけるようにと言っ配慮からである。

「食べる物はそこら中にあるので大丈夫。

暖を取るのでしたらいざと言っときの為に、山小屋で使おうと思った毛布もありますしそんなに気にしなくても問題ないです」

私は勇人の説明を聞きながら、まるでサバイバルマスターみたいと思っていた。

俺が暖の話を持ち出したのは訳があつて、明らかに愛奈は消耗しきつていた為ここで一晩休もうと考えていたからだ。

すでに日は少しずつ落ちてきていて、あと4時間もすればかなり暗くなってしまうだろう。

俺は日が暮れる前に、周辺を散策して落ちてる乾いた小枝と気を枝を一抱えほど集めた。

まずは、見通しがいいように川原の近くで野宿をすることにし、ズボンの中の埃をライターにて燃焼させ枯れ葉に火を移してからその上に枝を乗せていった。

火の用意が出来たので愛奈先輩へ火番をお願いしてから、山の中に入り、自然薯・木の実を取ってきて愛奈先輩の所に置いてから、ズボンを裾をたくし上げてから、手掴みで川魚を捕まえていった。

川魚は、拾ってきた枝に刺してそのまま薪たきぎの周辺に並べていき、自然薯に関しても軽く手で手ごろが大きさに割ってから木の枝に刺して薪の近くで火に当てていった。

私はその手つきから、普段の勇人からは全然想像できなかった。

勇人って帰宅部のくせにもしかしてサバイバル経験すごい豊富なのかな？とまで思っていた。

しばらくすると魚と自然薯が焼けたので二人で食べていたら、愛奈先輩が俺に普段サバイバルでもしてるの？って聞いたきた。

俺としては超常現象や遺失技術などを教える訳にはいかなかった為、ロストテクノロジー一瞬困ってしまった。

「えーと、普段は荷物運びとかミリタリーショップとか山で遭難し

た時の抗議とかのアルバイトをしてるかな？」

といいつつ、説明にちよつとムリがあるか？と考えていたが

「へー、そうなんだ、ちよつと意外。ゆうにとって大学でなんか孤立してたから、人付き合いとか苦手なのかなって思ってたのよね。

でも、ゆうとの以外の趣味で今すつごい助かつちやてるから何が必要になるかわからないよねー」

と笑顔で勘違いされて話しかけられていたが、内心勇人はホツとしていた。

楽観的で助かったと……

食事を取った後、愛奈先輩が眠そうにしていたので毛布を渡して寝かせた。

毛布は一人分しかないが、この気温なら問題はない。

俺は、半球睡眠という浅く寝ながら気配が近づいてきたら即起きれると言つ高度な技を使い寝た。

サバイバル2

空の色が紺から段々と薄い白色にかわっていく。

同時に寝付いていた森の命が活発に活動を開始する。

俺は、それを片方の脳で理解しながら、近づいてくる獣の気配を感じ取った。

獣の数は気配からすると一匹、まだこの世界に来てから一匹も獣を見たことがない俺としては多少緊張していた。

愛奈先輩を起さないように、その獣の気配を感じる方へ近づいていく。

その間、自分の気配を消しながら近づくと遠目で獣の姿が確認する事が出来た。

大きさ3m近く重さは300キロ近い熊だった。

俺は思わず、朝から肉が食える事に喜んでしまった。

そして確実に仕留める為に、両手のオレイカルコス製のグローブを無意識に握りしめる。

オレイカルコス オリハルコン 精神感応金属とも呼ばれる。硬度はライフル弾を受け止めても傷一つつかない。

俺の無意識に発した殺気に気がついたのか熊が鈍重な音と裏腹に軽快な速度で近づいてくる。

速度を緩めないのは恐らく、俺に体当たりして身動きが取れなくなつた所を殺そうと狙っているのだろう。

《亡霊ファントム》で体内の全ての人として在るための、全てのリミッターを切ってる俺からすればスローモーションに見える。

俺は、突進してきた熊を擺歩はいほを応用した高速移動を使い横へ移動する。

そして、体内の細胞の一つ一つから生体電気を集め、拳に集約しそのまま横腹に手を添え熊の体内に《九頭・左竜雷掌》を叩きつけた。その巨体を数度、震わせた後、熊は絶命した。

俺は熊の死骸を河原まで背負ってもっていくと、愛奈先輩はまだ寝ていた。

昨日かなり体を酷使してたから仕方ないなと思い、熊の解体を始めた。

10分ほどで大体のブロックに素手で解体し終える事が出来た。

あとは料理の為に鍋の変わりになる物が必要か……

俺は川の中から手ごろな石を取り出す際に、ドロなど余計な物を一度川で洗ってから、グローブをつけてる拳を石に叩きつけた。

石に直径30cm、深さ15cm程の窪みを作ってから再度、川で不純物を洗い流してから川から石を引き上げた。

昨日の薪の火種がまだ残っていたので周辺から手ごろな石を集めて薪の周辺に置き、その上に窪みをあけた石を載せた。

薪に乾いた枝をくべて火力を強くする。

少しづつ火に炙られ石から水蒸気が立ち上る。

それを確認してから、川の水をペットボトルの濾過を利用し完全に乾いた窪みの部分に水を入れていく。

「あとは……」

俺は、リュックの中から調味料セットを取り出して、熊肉を沸騰し始めたお湯の中に入れながら味を調整していく。

他の肉については、塩と胡椒で味をつけ枝に刺してから薪の周辺に刺して、直接火であぶっていった。

朝食が完成した頃、愛奈先輩が目を覚ましてきた。

「おはよー。ゆーと」

「先輩、おはようございます。よく眠れましたか？」

「うん、寝れたけど、これどうしたの？」

愛奈先輩が朝食を見て、口をあけて驚いていた。

たしかに、何も無い状態からここまで作るの是一般の人じゃ無理があるよなと俺は心の中で突込みつつ、サバイバルで習ったんですよと言いつつ、

「ゆーと、これって何のお肉なの？」

「えーっとウサギの肉です。」

「そうなんだー。でもウサギかわいそうだよな」

愛奈先輩がそんな事を言いながら朝食をおいしそうに食べている。熊肉です。とか言ったらどう、リアクションしてくるか結構楽しみでもある。

触らぬ神に祟りなしって言うし、余計な事は言わない事にした。

食事を摂った後、俺は特別製の特殊チタン製の複合合成ガラスをはめ込んだ黒色のG-SHOCKで時間を確認した。

今は午前9時か。午前10時になったら移動しようとして計画を立て、愛奈先輩へ伝えた。

その後、俺は薪の痕跡などを消す為に全てを川に流し、調味料などもリュックに入れて支度を終えた。

丁度、愛奈先輩も用意が終ったようで、こちらへ昨日と違うしつかりとした足どりで歩いてくる。

「ねえ、ゆーと。今日はどのくらい歩くの？」

俺は、愛奈先輩に聞かれた内容を再度確認する為、風を使い生命反応を知覚すると昨日と同じ速度であるけばお昼には到着できそうだった。

その事を伝えたあと、河原から立ち上がって俺と愛奈先輩は生命反応があった方へ向かった。

戦闘

俺達は、川が見える範囲で木々の間を4時間ほど歩いていた。

そろそろかなと思いつい、一度休憩をする為、愛奈先輩へ木陰で休んでくださいと言いつい、

水を汲みに川の方へ向かっていくと、複数の話し声が聞えてきた。

人数は4人ほどで一人は黒塗りの鎧を着て、西洋風の長剣を腰に差している。

残りの3人はどうみても騎士や兵士には見えない、15世紀のヨーロッパ人のような服装をしていた。

俺は4人の話を聞くために気配を消して近づき様子を伺っていると物騒な話が聞えてきた。

「ここから進んだ所の、集落の子供達を攫ってくればいいという話だったが、少し報酬を上乘せしてほしい。

部下から聞いた話によれば黒竜族という話ではないか？依頼内容が違つぞ？」

人を攫つという内容は穏やかじゃないな。

この世界では常識なのか？それに依頼内容が違つという事は恐らく、あの3人が依頼者つて事になるのか？

俺がしばらく考えていると話に進展があつたようだ。

「それでは、エルデーイク男爵様、一人辺り金貨200枚から400枚でどうでしょうか？」

「ふん、400枚だな、わかつた。それでは今村の周囲に配備してある部下達に知らせるとしよう」

部下か

俺は少し気になって、精霊を使い今向かってる方向を調べると100人近い生命反応を確認した。

この世界の常識をまだ理解していない俺達にとっては貴族と関るのはごめんこうむりたかった。

貴族とか金持ちとか権力者ってのは人間の力スみたいな物。

俺は、音を立てずにその場から離れ、愛奈先輩が休んでる木陰まで戻った。

愛奈先輩は俺の顔色を察したのかどうしたのか聞いてきた。

「先輩、問題が起きた。川原で見たことの無い服装をした男達が村を襲い子供を攫おうと話をしていたんだ。

そのうち一人は男爵と呼ばれてたから恐らく貴族だと思う。巻き込まれないうちにここから離れましょう」

俺は、愛奈先輩の手を掴み、村と反対の方向へ移動しようとするが愛奈先輩が動こうとしない。

動かない愛奈先輩の方を見ると、真剣な表情をしていた。

「ゆーと、ダメだよ、子供が攫われるのを黙って見過ごすなんてダメだよ、村の人たちに知らせにいこう。」

日本ならば真つ当な意見だったが、今は異世界にいる。

常識が通じる所ではない、だからこそ、俺の中では呆れ返ってしまった。

貴族を相手にすれば最終的に国が出てくる。

何の後ろ盾もない状況下で、貴族を相手にするには不安要素がでかすぎる。

権力構造を敵に回したらこれから大変になる事は誰でも、理解出来

るはずなのだが・・・

「ダメだよ、ゆーと。これから危害が加えられる人達を黙って見てる訳にはいかないよ。」

理解出来ていなかったようだった。

俺は溜息をつきながら、愛奈先輩の後を追いかけた。

私は勇人から、聞いた話を届ける為、ひたすら村へ向けて走った。途中で枝などで皮膚を切ったり擦ったりしたけど、5分ほどで建物らしき物が見えてきた。

建物の中からは、頭に黒い角を2本生やした男性が出てきた。

私はそのまま村に村の入り口から走りこみ、今出てきた男性へ近づいて話しかけた。

「すみません、今、河原の方で爵位を持つ人がこの村を襲うという話をしていました。すぐに避難したほうがいいと思います」

愛奈の言葉を聞いていた男は、愛奈を不信の眼差しで見ていたが、報告を告げてきた女性が嘘を言ってるようには見えなかった。

そして、近くの森の気配を確認すると、数十人の生き物が息を潜めている感触が伝わってきた。

「わかった。この奥に大きな屋敷がある。そこが村長の家になるからそこへ避難してくれ。それと俺の名前はグラドルというんだ。俺の名前を出せば分かってくれるはずだ」

愛奈が村長の家の方角へ向かうのを確認したと、笛を取り出し集落全体に危険が迫ってる事を知らせた。

私は、村長の家の戸を叩くと、60歳くらいの男性が出てきた。右手には西洋風の剣が握っている。

すぐにグラドールの名前と村が狙われている事を伝えたと、屋敷の中へ避難するように言われた。

屋敷の中へ入ると靴を脱ぐ場所と囲炉裏が部屋の中央に設置されていた。

俺は、愛奈先輩の分まで荷物を抱えて村の方へ走っていた。

村の囲いが見えてくるとすでに、戦いが始まっていた。村人に比べて武装をした兵士は3倍近くいるように見える。

そのうち、一人の村人が手に持っていた得物を弾かれてしまい、体制を崩された所に、もう一人の兵士が切り込んでいくのが視界に入った。

男を助ける為に、拳に力を集約し、打ち出す技《九頭・右竜歩掌》くす うりゅうほしょう 大気の爆ぜ、衝撃破が切り込んでいく兵士の鎧を背中から胸にかけて打ちつけ一瞬で絶命させた。

戦場へ走りこんだそ俺は、斬り込んで来た、男を剣を粉碎し、手刀しやうとうで頸椎破壊し死に至らしめた。

村を攻めていた、男達は一斉に勇人へ遅い掛かってくるが300kg以上のワーウルフすら5m以上もそ空に投げ飛ばす連携技の始点となりうる技《九頭・右竜翔扇》くす うりゅうしょうせんで、必要最低限の動きで次々と襲ってきた男達を空へ投げ飛ばしていく。

そして落ちてきた5mという高さから落ちて、苦しんでいる兵士に止めを加えた。

勇人の人外の戦闘力を見せ付けられた男達は顔を真っ青にして、全背を向けて逃げ出していった。

善意と後始末

俺は、逃げ出した兵士の後ろ姿を追いかけようとしたが、武器を持った村の男達が俺を取り囲んできた。

内心溜息をつきながら、両手を頭の上に向けて村人達に向って声をかけた。

「俺は、あんた達と敵対するつもりは無いし、用が終わればすぐに村から出て行く。だから剣を向けるのをやめて貰えないかな？」

「その用事というのはなんじゃ？」

一人の年配の白髪交じりの老人がが集団から抜け出して聞いてきた。

「ああ、俺の連れで黒髪の金眼した身長はあんたくらいの女なんだ。あんた達の襲来を襲う奴らの話を聞いたら、『危険も顧みずに』ここに知らせにきた女なんだが」

俺の質問に、老人が何故この村を助けたのか聞いてきた。

この世界が、常に命のやり取りをしている世界であるなら自分の利がないのに見ず知らずの者は逆に怪しい。

犯罪発生率が高い国などは、親しみやすく近づいていき背後から襲い掛かるのはよくある手だ。

だからこそ、ここに居る物達は俺を危険視している。

正面切つての敵対行動より、策を練られた方が性質が悪い事は歴史が証明している。

俺としては、あの貴族経由でここに居れば必ず何かしらの問題に巻き込まれると考えていた。

「なりゆきだな。河原で、村の襲撃の話をしてた奴がいたから、それを彼女に話したら、ここの村の人間に知らせに行くって聞かなくて追いかけていたら戦闘に巻き込まれた、それだけだ」

俺は話した後、溜息をついた。それを見ていた老人が若者へ武器を落ろさせた。

「そうか、それはすまんだったな」

「お前さんの連れだがわしの家にかくまっておる。礼が遅くなつてすまなんだ、ご助力してもらい助かった。何かお礼が出来ればいいのだが」

「御礼をしてくれるなら、今日一日だけでいいから村に泊めてくれないか？あとは軽く食事できる物を用意してくれると助かる」

「うむ、その程度の礼でよいのか？それならば、わしの家に泊るがよからう」

俺はお礼を言うと、あの貴族の連中を始末する事にした。

生かしておけば短時間で戦力を補充してくる可能性があるからであるが、老人は俺が村から出ようとすると、どこにいくか聞いてきた。

「後始末があるので、1時間程度で戻るからと連れの女には言っておいてくれ、それとこの荷物だが連れに渡しておいてくれ」

俺は二人分の荷物を老人に渡すと走って貴族を追いかけた。

勇人が貴族に追いついたのは5分後だった。

森の中から見ると統制が取れてないのが分かる。

エルデイーク男爵はイラついていた。

100人近くいた部下は半分になって逃げ帰ってきたからだ。その部下達の話によると妙な技を使う者が村にはいて数十人の部下を一瞬で殺したと言うのだ。

俄かには信じられない話だが、かつて大陸をおさめていた元王族のにわと黒竜族の末裔とあれば考えられない事もなかった。

だからこそ、商人と取引をし金額を吊り上げたのだが・・・

蓋を開けてみれば100人いた部下の57人が死亡しかもそのうち10人は伯爵に借りた騎士も含まれておりどういい訳をしていい言葉もなかった。

カルス・ウーネイ伯爵には町を荒す魔物を操る邪神を奉じる村を殲滅するためと説明していたが、その村が黒竜族という話はしていなかった。

龍をも手懐ける事が出来ると伝承にある、黒竜族には手を出さないようにと暗黙の了解がルーデン自治区にはあったからであるが・・・

伯爵へ死んだ騎士の言い訳を考えてる間、奴隷商人達がこれでは話が違つと喚わめいていた事に腹が立つてきた。

こいつらさえ居なければ、俺の立場が危うい事になる事も無かつたのにと・・・

そこで俺はふと名案を思いついた。

腰から剣を引き抜くと、その名案を実行する為に剣を振るつた。人が倒れる音が立て続けに河原に響く。

帰還するために先へ進んでいた兵士が、人が倒れる音に気がついた時には、奴隷商人は全員死体となって転がっていた。

一人は胸を貫かれ、一人は首を跳ね飛ばされて、そして最後の一人は逃げようとしたのか背中を袈裟斬りにされて息絶えていた。

「男爵様これは一体？」

俺が目をかけてる兵士が疑問を口に出してきた。
当惑していたのは仕方ない事だろう。何せ、自分達のクライアントを殺したのだから

「いま、ここにいるのは俺とお前達、そしてこの黒竜族に殺された商人。」

そして、それを守ろうとして殉職した騎士と仲間それだけだ。わかるな？」

「なるほど、それならば大義名分は立ちますな」

「うむ。では戻りあの村を殲滅するため本国のイスメラル帝国へ軍の派兵を依頼するでしょうか」

部下達も上司が処罰を受ければ只では済まない事を理解していた。

俺は、一部始終を聞きながら最悪な事になったと思っていた。
あいつらを生かしておけば、国が戦いに加わる事になる。それを防ぐ為には一時的な手段とは言え、この場にいる者を全員殺した方がいい。

どちらにせよ、後の憂いを残すのはよほどの馬鹿だけと理解していたため一人残らずここで始末し獣の餌にする予定ではあった。
相手がどんなに命乞いをしてきても……

俺は、その川原で行進していた一団に森の中から突っ込んでいき、そのまま兵士の心臓の部分を打ちぬき殺した。

そのまま、体術で次々と兵士を殺していく。

エルディーク男爵と先ほど話してた兵士、そして数人の男爵の近く

にいた者はその凄惨さに目を見張った。

「き、き、貴様。一体、何者だ？」

俺はそれを聞きながら、今から殺す相手に何の意味があるんだ？と疑問に思った。

すでに、生き残った兵士は男爵の周りにいる3人だけで、その3人も俺に向かって距離を詰めて剣をそれぞれ振るってきた。

一人は、俺の拳で体を貫かれて、川原から森の方へ吹飛ばされて木に激突し、木を押し折りながら絶命した。

残った二人の兵士が、俺に切りかかるが切りかかってきた剣をオレイカルコス製のグローブで金属音を響かせながら受け止める。

もう一人が降るってきた剣は峰に拳打を打ち込み破壊し受け止めた剣を引こうとした兵士に対して一歩踏み込む。

相手の大腿骨に掌底を打ち込みむと、兵士の太股が爆散しショック死した。

そのまま、剣を砕いた兵士の胸部を殴りつける。

殴られた衝撃により胸骨と心臓が破壊され、そのまま兵士の死体は吹き飛び大岩にぶつかり、へしゃげた音を響かせた。

それを見ていた貴族が情けない声を上げながら、助けてくれと喚わめいていたが、そのまま近づき頭の上に左手を置き首を固定。

手刀で首を刈った。

俺は死体を始末する為、森の中に捨ててから村に戻った。

自由都市

男爵達を始末してから一週間が過ぎた。

当初は、すぐに村を出るは予定であった。俺は村に滞在してる理由は先立つ物がないと言う理由だった。

それに、いつ襲撃がくるか分からない状況下で腕の立つ者は雇った方がいいと考えるのは当然の結果である。

一日金貨1枚で雇われたのだが……
貨幣の価値を聞いても日本円で金貨1枚で1万円程度、命を賭ける割には安すぎると思うが仕方ない。

それよりも問題があつて、この用心棒になる際に、じゅうし獣紙で契約書を作ろうとしたら、その文字が理解出来なかった。

俺と愛奈先輩は、急遽文字とこの世界の文化・常識を教えてもらう事も契約料に含めて村の専属傭兵としてしばらく滞在する事になった。

文字の習得に関しては、俺より早くわずか1週間で愛奈先輩は覚えてしまっていた。

俺自身は、まだ覚えるのには時間が掛かりそうだ。

愛奈先輩には、俺の戦闘術に関しては、幼い頃から古武術を習っていたという事にしておいた。

この村で、歴史を学んでいて気がついた点はこの世界は1万年前以上より前の記録が存在してないという点だった。

それでも一万年も記録が残ってる時点で異常だとは思つが……

・

地理に関しては黒竜族の村は元々、この自治区を納めていた王族の生き残りという事で、千年前に起きた動乱により国は崩壊。

隣国の帝国の植民地になると長老から教えてもらった。

村の周辺の話聞く限りでは、熊、狼などの肉食生物が棲息しているらしい。

淡泊質は、食生活に欠かせない事から、捕獲に大きく貢献してる勇人はこの村では女性に大人気だった。

その状況を見ていた愛奈は、不服そうな顔をしていた。

ある日、勇人が薪を割りまきをしていると、村の中心部から悲鳴が聞こえてきた。

俺は急いでそちらへ向かうと、村長に教えてもらった緑色のワイバーンが村の広場に陣取っていた。

大きさは7mの横幅15m程ある。

俺はこの傭兵という事もあり、すぐに処理するためにワイバーンへ突っ込んでいく。

ワイバーンも走りこんできた、男に興味があつたのか尻尾を振るう。俺は、その尻尾を左半身で受け止め、受け止めた勢いのまま右足を踏み出し右半身の拳打をワイバーンの体の中心に打ち込んだ。

衝撃で動けなくなったワイバーンの頭上に跳躍し、体内の細胞が作り出す電気を左手に集約しそのままワイバーンの頭に掌底を打ち込み脳を破壊した。

しばらくすると女子供を非難させていた村の者達が戻ってきた。

俺がワイバーンを一人で仕留めてたのを見ると目を丸くしたまま驚いていた。

その後は、村人と一緒にワイバーンの剥ぎ取りを行った。

ワイバーンは、武器や防具の素材、食材、魔法道具の加工にも利用できるらしく、かなりの値で売れるらしい。

用心棒の為、ワイバーンの売り上げは全ての村の物になってしまうのが残念。出来高にしておけばよかった……

ここ最近、懇意にしてくれてる20歳くらいのリリルという女性の

話だと金貨2000枚くらいにはなるらしい。

村の若者達がワイバーンを外の町へ運び換金してる間に、俺は文字の勉強をした。

ワイバーンの素材を売りに行って来た若者が戻ってくると、その日は宴になった。

町から購入してきたお酒や普段目にしない食物を食べる勇人を村の女性は得物を狙う目で見ていた。

「ちよつと、どういう事なのよ？勇人！村の女の子達の私を見る目が親の仇を見るような目で見てるじゃないのよ！」

「いや、俺にそんな事言われてもな」

勇人としては若い女性から好意を寄せられる事は男としては嬉しい事もあり、にやけていた。

それに愛奈先輩とはなんとも無いのに、誤解されるのは困ってしまった。

この世界では、常日頃から危険と隣り合わせで生きてる女性にとって強くて遅しく、やさしくルックスもそこそこと言う男性は好物件なのである。

現代の日本風で言えば稼ぎがよくて、ルックスがよくて、やさしい男と言う感じである。

だからこそ、ワイバーンを倒してからの黒竜族の若い女性達は機会があれば勇人を旦那にしようとするのは分からない話でもない。

強攻策として夜這いなどをかけてきていたが、そのたびに愛奈にジヤマをされる旅に両者に蟠わたかまりが出来ていった。

狩猟で獲得した皮や肉を売りさばく為に、何度か往復した道を俺と愛奈先輩は町へ向って歩いていった。

「ねーねー、ゆーと。町までどのくらいでつくの？」

愛奈先輩は、村に居た時は、イライラしてたのは嘘のように、笑顔で話しかけてきた。

俺は、その顔を見ながら現状に陥った事を考えていた。

結局、あの後、男としての生活力に眼をつけた未婚の女性が勇人を狙って来た。

それも、勇人がいる村の女性だけではなく、近隣の村からも噂を聞きつけて有力な部族の長の娘までも婚姻に動いてきた。

同じ村に住んでいる村娘なら、愛奈も邪魔したりは出来る。

それが、有力部族の長の娘となると村でお世話になってる以上、無碍には出来ず、愛奈のイライラはピークに達していた。

そういう経過もあり、読み書きも覚えた後、村の護衛を辞退して近くの町で住む事にした。

元の世界から一緒に、訳の分からない世界に飛ばされた愛奈の勇人への依存度はかなり高く、周辺の娘達の影響もありそれが恋になるまで時間はかからなかった。

「ん〜。そうだな、あと5時間くらいでつくんじゃないのか？」

「えー。まだそんなにあるの？」

すでに村から出て、8時間程歩き尽くめであるが、13時間程度である程度人がいる町までいけるならば近いと行っても差し支えはな

い。

愛奈は基本、村の女性達に混じり家事をしていた為、狩猟をしている男性と違って1ヶ月以上この世界にいてもそれほど基礎体力は鍛えられてない。

村を出る際に、傭兵としてもらったお金は少し色をつけてもらっており金貨70枚ほどであった。

金貨70枚だと日本円にして70万円程度、ある程度暮らす分には問題がないと言えよう。

「ゆーと。今から行く町ってギルドってのがあるのよね？そこで借金稼いで家買おうよ！」

それを聞きながら、俺は、家買うって相当なお金必要なんじゃないのか？と心の中で突っ込んでいた。

村の男に聞いた話だと魔物を倒して討伐部位証明を持っていけばお金と引き換えてくれるらしい。

そして、家建てる為ってどのくらい働かないといけないんだとひそかに落ち込んでいた。

それに無理矢理買わなくても宿屋があるらしいのでそこでいいんじゃないのか？と突込みを入れそうになったが楽しそうに話していたので水を差すのをやめた。

「そうですね、先輩。」

「うん！それと先輩じゃなくて愛奈でいいよ。いつまでも他人行儀だと困るでしょ？」

俺は心の中で、いえ、他人ですが？と。と突っ込んでいた。

その後も、実りの無い話を愛奈が振り、勇人が適当に相槌を打ち反応するという事を続けながらも町まで近づいていった。

「ふーん、町って聞いたからすつごい大きいって想像してたのにそのでもないんだねー」

愛奈先輩の感想を聞きながらは俺は、崖上から町を見下ろしていた。

ルーデン自治区ルアーゼン自由都市

ここの代表者は有力な7商会の代表者が勤めており、多数決で町の意向を決めているらしい。

都市の中心に政治中枢がありそこから放射線状に4方に道が伸びておりそれが町を取り囲んでいる城砦を通して周辺の街道へ伸びている。

人口は1万人ほどの町らしい。

「今日は、宿に泊って美味しいものでもたべよう。」

愛奈先輩の言葉に従っては俺達は、自由都市に向った。

ギルド登録！

いま、勇人と愛奈は自由都市の4本ある主道の南通りを中央広場へ向って歩いていった。

中央広場は町の中央にあり、広場の大きさは東京ドームほどもある。中央に噴水があり広場がある。

その周辺を囲うように行政局が設置されており、冒険者ギルドもそこにある。

勇人と愛奈はまず、町で宿屋を確保する事にした。

宿の看板がある西部劇のような両開きの扉を開けると扉の近くにあるのは精算のカウンター。奥には10程度の丸いテーブルと椅子が設置されており食事件居酒屋という感じであった。

どうやら奥のカウンターが宿を借りる所のようなだった。

たどり着いたのがすでに夕方を過ぎてる事もあって飲食をしたりお酒を飲んでる人が多く縫って歩いていき、奥のカウンターで部屋を借りた、

その際に、部屋の金額を確認したが一部屋一日2食つきで銀貨50枚、同じ部屋だと銀貨25枚追加だけという事だったが愛奈先輩とはそういう間柄ではないので2部屋借りて、一週間泊ることにした。二人で一日金貨1枚の為、金貨7枚だ。そのまま、お店の女将さん

へお金を渡した。

部屋の大きさ的には、日本でいう一人に住むくらいのレオパレスという感じだ。トイレは共同のようだった。

勇人がこの世界にきて、困ったのはお風呂が無いという点である。せいぜい水で体を拭くくらいであり、勇人はそれでもよかったが愛奈は大変シヨックを受けていた事もあり仕方なく勇人は村で檜風呂とは名ばかりの見た目お風呂みたいなのを村では作っていた。

とにかく、しばらく拠点をきちんと構えなくては行けない事もあり勇人はすぐに寝た。

その頃、愛奈は悩んでいた。たくさん歩いて汗をかいてお風呂にも入れない。水でしぼったタオルで体を拭いているが、好きな男性の前ではいい匂いを出したいというのは女の本能である。

その点、今日は別々の部屋に泊れた事は幸運でもある。汗臭い匂いを勇人に嗅がせなくていいからだ

「あーシャンプーとリンスと石鹸ほしいなー」

切実な思いを込めて、愛奈は口から言葉を発していた。

.....

翌朝、勇人と愛奈は1Fの食堂で軽い食事をとった後、広場にあるギルドを尋ねていた。

ギルドの入り口は、宿屋と同じ両開きの押して開く木の扉で出来ていた。

開いて入ると

たくさんの冒険者達が掲示板に入っている書類を見て吟味していた。

ちかくの、受付へ愛奈は近づいていき

「すみません、冒険者登録をお願いしたいのですが？」

聞くと、受付のブロンドのネコミミをはやした獣人の女の子は

「はい！いらっしやいませ！初めましての方ですか？」

聞いてきたが、それを見ていた愛奈は心の中で、猫なのに語尾にニヤってつけないんだ・・・と突っ込みを入れていた

「はい、よろしくお願いします。」

「わかりました。私の名前はヘネシーと言います、適正を見ますのでこちらへどうぞ」

と言いながら愛奈と勇人は別の登録をするための部屋に連れていか

れた。

そこでは中学校や高校であったように体力測定 of 器具があり多少現代とは違っていたが・・

1時間ほどで検査を終えて二人は控え室で待っていた。

ガチャ・・

扉を開けて二人の女性が入ってきたのが見えた。

「えっと、この二人です。アイネスさん」

アイネスさんは虎耳をもつ均整の取れたプロポーションと170cmの身長 of 女性だった。

ちなみにヘネシーさんはネコミミのアイネスさんに負けないプロポーションもちの165cmくらいの女性である

「初めまして、私はこのギルドマスターをしているアイネスと言います。これからよろしくね」

「よろしく願います」

愛奈は釣られて挨拶をしていたが、勇人は、なんでギルドマスタークラスが一介の新人にすぎない俺達にわざわざ会いに来てるんだ？
と思っていた。

ギルドマスターって言えば村で聞いた限りかなり高ランクの冒険者がやっており一介の冒険者と接点を持つ存在じゃないはずだ・・・どういうつもりだ？

だが・・・

「初めまして、こちらの女性は愛奈、俺は勇人と言います。よろしくお願いします」

言いながらも勇人は、アイネスの挙動を見過ごさないように視線を外さないようにしていた。いつでも動けるように・・・

それを見ながら、アイネスは、勇人の態度と視線・考え方を驚きの視線で見ている。

ヘネシーが先ほど、愛奈と勇人に行ったテストは普通の冒険者が誰でもうけるテストのようなものだが・・・

勇人が出した数値があまりにも高すぎたからこそ、アイネスが興味を覚えていたのだった。

勇人は元の世界ではミュージアムを相手に戦っていた事もあり、通常の状態でもSランク冒険者に近い実力をもっている。

Sランク冒険者といえば、一人で魔法騎士一個小隊を壊滅させるほどの力を有しており一人いるだけでギルドの戦力を左右するほどの力をもっている。

だからこそ、このルーゼン自治区でも現在SSランクのアイネスを抜かすとSランクの冒険者は1万人中20人にも満たない。

勇人の戦闘力がどれだけ尋常ではないか分かるだろう。

それに傍らにいる女性も、戦闘力は皆無に等しいが、文章・知識・計算力などは群を抜いておりそれだけで役所に勤める事は可能だろうとアイネスは見ている。

これほどの拾い物はそうそう無いが、一目見てあとは様子を見ようと考えた。

「それでは、お二人ともこれからがんばってくださいね」

そついい残してアイネスが部屋を出ていくのを見ると

「では、こちらのカードがお二人のカードになります。お二人ともFランクからのスタートとなりますのでがんばってくださいね。一応、ある程度仕事をこなして問題ないとギルドで評価しましたらランクを上げていきます。ランクはFからはじまりAまで続きます。そのあとはs、ssランクがありますが、ムリをしないようにがんばってください。」

「あ、ヘネシーさん一つ聞いてもいいですか？」

「なんででしょうか？」

「この町で家を購入する場合っていくらくらいするんですか？」

「そうですねー金貨2000枚からですかね？でもムリをしてお金は稼がないようにしてくださいね」

最後にヘネシーはそう締めくくって勇人と愛奈を受付まで案内してから別れた。

登録だけで帰るのはもったいないと思い、勇人と愛奈はしばらく掲示板のところをチェックしていたが、ぼーっと見てる勇人とは違い、愛奈は親の仇を見るような目でナニカを探していた。

30分くらいしてから

「ゆーと、いい依頼見つけちゃた！」

本当にいい笑顔で勇人に愛奈は話しかけてきた。

勇人はそれを見ながらどこかで見たことある気が……と思った

世界観&人物編集

世界観編集

ギルド

各国の冒険者達作り上げた今でいう人材派遣会社

ランクはF〜SSまであり個人の力量を各ギルドマスターの判断によりランクの序列が変更

ルーデン自治区

大陸でもっとも南方に位置。魔物と獣人が治めてる地域

現在は、イスメラル帝国の属国

黒竜族

元はルーデン自治区を治めていた王族の末裔、現在は隠れて済んでおり幻の民と呼ばれている。村の位置はルーデン自治区のもっとも南方にある亡失の山の麓に位置する。

いくつかの集落がある。

ルアーゼン自由都市

有力な7商会の代表者が町の運営をしている。人口1万人程度、位置的には勇者達が居た村より東へ半日歩いたところにある。

人物編集

水梨愛奈 みずなし あいな 21歳 身長172cm 3サイズ秘密 体重 秘密

経済大学に通つてる4年生

枝流勇人 えりゅう ゆうと 18歳 身長194cm 体重88kg

ある事件によりDADDYFACEの草刈鷲士より九頭竜を伝授される。

異世界に迷い込んでから霊視が功を制しており精霊により広範囲を知覚が可能

“九頭竜”

ファントムを支配することで成立している対仙術・仙術。

ファントムとは、人間の脳で処理している中でも自我以外の部分を指す。

人間が無意識で処理している生理機能全般を指した呼び名と思われる。

それらを意識的に制御可能。不随意生理機能も完全に支配下にある。。

肝臓を無理やり使って毒素を排出したり、磁石も使わず方角を認識したり、あるいは指で触れるだけで電気のプラスとマイナスが分かったりする。

人体の潜在能力の全てを任意に出し切ることができ、かつそれを

行っても耐えうるレベルまで肉体も鍛え上げられている。

身体能力を用いた行為全般が人間の限界を遥かに超える。

物理的に損壊しない限り、ゾンビも同様に全力で戦い続けることが可能。

また、四肢が欠損した場合の構えや、“火を噴き戦闘機並みの巨大さで、翼を持った二足歩行型爬虫類”を相手取るための型すら存在する。

アイネス

ルアーゼン自由都市ギルドマスター

冒険者ランクはSS 大陸に現在存在するSSランクは8人

身長 170cm 3サイズ 96 58 92

体重 51kg

獣人であり虎科

紋章魔法と呼ばれる文字を予め体に彫っておく事により意識しただけで特定の魔術を行使可能

戦闘での使用武器はバックラーとシャムシエルかエストック

年齢 29歳

ヘネシー

ルアーゼン自由都市受付担当係り

冒険者ランクはE ルアーゼン自治区で1番目に多いランク

身長 165cm 3サイズ 90 60 92

体重 47kg

獣人であり 猫科

年齢 18歳

S Sランク冒険者との対戦！

いい笑顔で愛奈が渡してきた依頼書を勇人が覗き込むと

ここから3日ほど行ったところにある鉱山に住み着いたワイバーンの討伐という事であった。

以前も、勇人が一人でワイバーンを倒したって聞いてた愛奈は勇人が倒せるなら大した魔物じゃないよねと思いついてきたのだ。

しかも金額は破格の金貨1700枚 部位は換金して売る事もいいそうなのであわせると家を買えちゃうという愛奈にはとびつきりお得な依頼だった。

その依頼書の左上にSランク冒険者5人以上のパーティと書いてあったのは別として・・・

勇人も愛奈にそれを見せられて、ワイバーンくらいなら問題ないかとそのまま依頼書を先ほど登録してくれたヘネシーさんの窓口へもっていき差し出す。

「すみません、ヘネシーさんこれをお願いしたいのですが？」

「ちょっとこれってW勇人さん分かってるんですか？これは竜の一種で倒す為には熟練の冒険者がパーティで当たる物なんですよ？」

そう言われても実際倒した経験のある勇人としては

「はあ」

としかいう事が出来ない。

その言葉を誤解したのだろう、ヘネシーが眉を潜めてみてきたがそこでお助けマン登場

「ちょっと！変な事言わないでよ！勇人は前一人で倒した事あるんだから。」

そんなに強いと思ってない勇人ですら一人で倒せたのだ。愛奈は自分が言った事がどれだけおかしいか分かっていた。

だが勇人の身体検査の高さを知ってるヘネシーとしては確実に嘘とは判断が出来ない事もあり

「少し待っててくださいね」

しばらくしてから、ギルドマスターのアイネスを連れて戻ってきた。

「勇人さん、愛奈さん、少しこっちに来てもらえますか？」

そのまま、ヘネシーに促されヘネシー 勇人 愛奈 最後にアイネスが通路を歩いて出た先はギルドの裏庭であった。

裏庭といっても300坪はありそうだが・・・

「えっとじつはですね・・・」

言いかけたところで

「ヘネシーここから先は私が言うからいい」

「勇人、ワイバーンを一人で倒した実力を見せてもらおうか？私との戦いでそれなりの力を示せば受けるのを許可しよう。ダメなら他の依頼を受ける」

「えーと」

女性を殴る気がない勇人としては返答に困っているが

「ゆーと、ぼっこぼっこにしちゃえー」

と後ろで何か騒いでる愛奈がいるわけだが・・・

「面白い、ぼっこぼっこにしてもらおうじゃないか？」

それを聞きながら勇人は愛奈先輩、なに闘争心に火をつけちゃてるんですかーやめてーと心の中で突っ込んでいた。

アイネスは勇人を見ながら腰に差してある剣を引き抜く。刀身は良く磨かれており木目が入っている剣である。右手に剣を構えて左手に鉄製のバックラーを構えた。

何気ない動作だが、それだけで勇人はかなり強いと感じていた。

勇人も村で出るときにもらった両刃剣フロートソードを両手で持ち正中に中段の構えを取る。

それと同時にかなりの速度でアイネスは剣を右手一本で横に薙いでくる。勇人は一步下がり交わすがそれに合わせて踏み込んできたアイネスの剣が両刃剣をに亀裂を入れる。

そのまま、追撃で入れてきた突きを両刃剣で受け止めたが剣が根元から折れてしまっていた。

あまりにも一方的な展開であつたが、それでもSSランクの冒険者相手にここまで善戦するだけで相当なものである。それでもアイネスから見てもAクラスの実力だと見てとれる、とてもではないが一人でワイバーンを倒す実力ではない。

「あーやっぱり付け焼刃じゃだめか」

そんな声が聞えてきた方向を見ると今度はグローブを嵌めているのが見えた。正気か？私の剣を素手でやり過ごせると思っているのか？舐められたものだ・・・

それを見ていたヘネシーは

「あーアイネスさん怒ってるねー」

「え？そうなの？」

と二人して干し肉をハムハムして見ている。観戦モードである

二人が再度離れる

「勇者、お前がどれだけ強いかは大体わかったが、全力でいかせてもらおうぞ?」

勇者としては何でそんなにテンション上がってるんですカーと突っ込みを入れたかった・・

ヘネシーが司会のようにノリノリで開始の合図をしてきた。

アイネスは魔法により筋力・力を通常の倍まで引き上げる紋章魔法を使った。これにより先ほどの先制攻撃の倍近い速度で動ける。次の瞬間には勇者に向って突進の勢いを使い突きをしていた。

勇者はそれを右にかわす。

アイネスも突きをしたまま右に剣を振るがそれも後ろに下がられかわされてしまう。

そのあと斬り突き薙ぐが全てかわされる。

そうすると突然

キンッ

という音と共にグローブにアイネスの剣が止められてしまっていた。

「ばかな・・鉄すら斬れるのに・・」

それと同時に勇人が一步無造作に踏み込んでくる。《九頭・右竜徹陣》

ゾクツとした瞬間打ち出してきた拳に盾を当て本当に感であったが盾から左手を離す。勇人の拳が盾に当たった瞬間盾が折れ曲がり凄まじい速さで後方へ飛んでいき裏庭にあった木を貫通し柵を破壊し隣の講堂間の壁を突き破っていた。

「え？」

勇人、以外の3人が声をハモらせていた。

その言葉の後、勇人は

「えっとアイネスさんまだやりますか？」

「いいえ、大丈夫です。これならワイバーンも一人で倒せますね・・・」

言いながらもどういう技なのよ。こんなのSSランクの冒険者の中でも上位に食い込むわよと思った。

そう思いながらも、獣人族の女性は強い男オスに引かれる習性があるため、アイネスも自分に吊り合う男がいないためまだ未婚であったが、勇人ならいいかもと考えはじめていた。

V S 古代竜タクティカルドラゴン

勇人は今、山を登っていた。例のワイバーン討伐の依頼を受注したからであったが・・

「はぁ・・」

勇人は後ろから来ている、虎耳の女性を見て溜息をついていた。

話は2日前に戻る・・

ギルドでワイバーン討伐の依頼を受けた、勇人と愛奈は次の日に出かける事にして宿屋に帰ったのだ。

愛奈は購入する家を調べるからという理由でワイバーン討伐は勇人一人でする事になっていたのだが、鉾山へ旅立ってから3時間ほどすると北街道で、フツ。まっけたぜ！勇人！みたいな感じでギルドマスターのアイネスが座って待っていたのだった。

ギルドマスターのアイネスが言うには有望な新人が死んだら困るという事で、戦いを見届ける為に着いていくという事だったのだが、それは建前で討伐に向う2日の間にニヤンニヤンして自分の男にしようという子悪魔的な考えをしていた。

幸い、宿屋でも別々の部屋を借りて鍵をかけておいた為、問題は発生しなかったが・・

そういう事もあり、勇人はやけに積極的にスキンシップしようとしてくるアイネスに対して溜息をつくのも仕方なかった。

「アイネスさん、あれがたぶん鉱山入り口ですよね？」

「ええ、そうね」

勇人、どんな体力してるのよ？もう山を登ってから12時間ぶつ通しで歩いてるのに疲れてる感じすらさせないなんて、ドワーフ族でもこんな事ありえないのに、やっぱり私の旦那にする資格十分だわ！夜とか寝かせてくれなさそう！

とかもう後半は桃色想像をしているアイネスである。

鉱山入り口に到着し入り口周辺を見渡すと散乱したツルハシやスコップ、トロツコなどが放置されていた。どうやら、ワイバーンが来た際に放り出して逃げたのだろう。いまいる入り口付近は比較的開けており、入り口から四方に100mほどの広場になっている。

鉱山の中までアイネスと勇人の匂いが入ったのだろうか？音を立てて一匹の魔物が出てきた。

「あれ？アイネスさんこれもワイバーンの一種なんですか？」

勇人がアイネスの方を見ると、アイネスが顔を蒼白にしながらも

「違うわ、これは・・・古代竜タクティカルドラゴンよ」

なんでこんなドラゴンがいるのよ？

大きさは、ティラノサウルスにプテラノドンの翼のようなモノをつけてるものだ。魔物の大きさは15m翼の幅は18m近い。ワイバーンなど比較にならない。

SS冒険者クラス5人はいないとこんな倒せないわよ？災害指定クラスの魔物なのに・・依頼主は間違いなくこんな依頼したら金貨が数万枚は必要だと知ってわざと弱い魔物を出してきたのね。

「勇人！この魔物はランクSSSよ、私たちじゃ間違いなく勝てないわ。一度逃げるわよ」

アイネスがそういうが、来た道が魔物に塞がれてしまった。

「くつ、勇人！私が道を作るからその間に・・？」

言いかけると、勇人が歩いてタクティカルドラゴンへ近づいていく。これ倒すとつまり賞金がたくさんもらえるって事だよな？でも保護動物だったらどうしようか？

「アイネスさん、この恐竜倒したらお金ワイバーンよりもらえます？」

「ええ、でもこんな二人じゃ倒せないわよ」

「いえ、一人で十分です。」

いいながら《^{ファンタム}亡霊》を使い細胞を直接支配下におく。

タクティカルドラゴンの攻撃範囲に入ったのだろうか、いきなり尻尾を振られた。それに対して勇人は一歩踏み込む、踏み込んだ箇所

(大地)が陥没する。

《九頭・左竜落崩》

振られてきた尻尾に掌底を当てそのまま半ば斬りつつたがそのまま尻尾に吹飛ばされ空中で体勢を整えて足から着地する。

「ちっ、結構硬いな。ならば!」

そのまま勇人は魔物に向っていく。そして魔物の体まで1mの所まで一気に接近し、

《九頭・右竜徹陣》

強靱な鱗で守られてる魔物の鱗を気の力で吹飛ばし体に直径50cm 深さ3mの大穴を開ける。そのまま、反撃してきようとする魔物の後ろに回りこみ先ほど半ば切り取ってある尻尾に向って気を載せた手刀を振るう。

《九頭・左竜閃刀》

千切れかけた直径5m近い尻尾が斬り飛ばされ広場に転がる。え? アイネスは目の前で起きてる出来事が信じられない。

勇人の方を魔物が見て、攻撃をしかけようとしているが尻尾でバランスを取っていたため、バランスが崩れて倒れてしまう。

すかさず勇人は止めを刺す為に頭に向うがそれに合わせて6m近い腕が振られてくる。

《九頭・右竜徹陣》

今度は、その腕の掌に穴を空けてその反動で中に腕を浮かす。その間に倒れてる頭にいき、体中の細胞から生体電流を集め、そのまま魔物の眼球部分を掌底で肩口まで突き刺す。

《九頭・左竜雷掌》

それにより眼球を突き破り脳まで到達していた掌底の強力な電撃により脳、神経細胞が焼かれ破壊される。体を一瞬振るわせたあとにタクティカルドラゴンは活動を停止した。

「アイネスさん、終わりました。ワイバーンよりやっぱり強いですね、でもこんなに大きいと一人じゃちょっと運べないんですけどどうしましょうか？」

「え、ええ。ギルドマスターだけでもってる魔道通信機があるからそれで連絡取るから大丈夫よ」

まさか、一人で倒しちゃうなんて。強いとは思ってたけど、ここまですんで・・・これならSSクラス？ううん一方的に倒してたのからみてもSSSクラスよね・・・？でも新人が一気にFランクからSSランクになるのっていいのかしら？それにこれだけ強いんだもの、私の伴侶としてはぴったりじゃないの

帰り道は絶対に手に入れるんだから！アイネスは得物を狙う虎科のごとく目を勇人に向けていた。

それから4日間、ドラゴンの死体の見張りをしながらも勇人はまだ

魔物が残っているか坑道調べていたが何もなかった。待っていると大きな荷車を複数人が押してくるのが見えた。

見張りの間、アイネスは積極的に勇人に過剰なアピールをしていたが、鈍感な勇人はその事に気がついていなかった。

アイネスは知らないが勇人は鈍感な為、言葉で言わないと分からないのだ。つまり草食男子というやつである。

さすがに荷車を引いてきた10人のギルドの職員がドラゴンを見て呆けていた。

「アイネスさん、これ本当に新人一人でやったんですか？」

「ええ、そうよ」

職員はそれ以降にも言わずに2つの荷車に解体していった部位を載せて勇人とアイネスと一緒に町に向って帰路についた。

冒険者ランクとハニートラップ

ルアーゼン自由都市に勇人達が戻ってきたのは、町を出てから10日目の朝であった。

荷車に載せて来た、SSSランクモンスターの姿を見て冒険者だけではなく町の人まで見物しに広場に集まってきた。この世界に娯楽という物が少ない以上仕方ない事であるが、

その頃、勇人達と言えばルアーゼンのギルド建物内の事務所にて話し合いをしていた。

「もう、なんで一人でSSSランクのモンスターを倒したのに、SS+にしておこうって言うてるのよ。ほんと、むかつくわ。」

そう言ってるのは勇人と愛奈の前に座ってるギルドマスターのアイネスであった。

「それに勇人、本当にギルドランクAでいいの？」

「ええ、ギルドランクSからだと討伐の為にギルドから拒否出来ない依頼とかくるんですよ？」

「そうだけど・・・でも私としては私の勇人がきちんとした評価を受けられないのはちょっとねー」

それに勇人がギルドマスター変わってくれれば、私がギルドマスターを引退して勇人と結婚できるわけだし・・・

「アイネスさん、私のつてのはなんですか？勇人は誰の者でもありません。」

「なら、いいじゃないの？別に勇人と愛奈さんはそういう関係じゃないのよね？」

キツと愛奈をアイネスが見ながら敵愾心をもった眼差しで見る。

すでに勇人は宙をボーッと見ていた。

さつきからこの会話の繰り返しなのだ。さつさと賞金もらって持ち家買ってお風呂作って入りたいな・・・と思うのは仕方ないだろう

「はあ？そういう関係ってどういう関係なんですか？というかアイネスさんには関係ないですよね？」

「あら？強い男に惹かれるのは女の性じゃないかしら？」

勇人がふと扉の方を見るとヘネシーが手を招き猫のようにしていた。勇人は音を立てないようにそっちへ行き、部屋から脱出した。

「ありがとう、ヘネシー。助かったよ」

「イエイエ、勇人さんは大人気ですからねー仕方ないですよ。」

ヘネシーも18歳というこの世界でいうと結婚適齢期より少し超えていて焦っていたのだが、アイネスに至っては29歳 完全に行き送れである。ヘネシーもアイネスが行き送れていて、やはり同じ女性だからだろうか？子供が欲しいというの共感できるし、年齢的に

そろそろ子供を作らないと行けないと言っつのは分かっつてはいるが・・

どこの世界でもいい男を捕まえて、子供を無事・安全に育てるといっつのは女の本能である。

だからへネシーとしても、勇人を捕まえれば永久就職できるよね！
という事で必ずしも勇人をあの現場から助けたわけではないのだ・

「勇人さん、よかつたらまだ、アイネスさんと愛奈さんは話し合っつが報奨金を含めて長引くと思っつますので、まだ町とかそんなんに見て廻つた事ないですよね？よかつたら気分転換のついでに案内とかし
ますよ？」

おー、へネシーさんつて気がきくなー。と勇人は思つていた。

「いいですよ、それでは行きましょつか？」

- - - - -

へネシーは勇人に広場の中心に、ギルド、行政商館、警備館、兵士駐在館などがあることを説明してから、南通りには主に市場が多い事を通りを歩きながら説明していく。

「それですすね、南通りには市場が多い事もあつて、食堂と屋台が多いんです。」

「へー、そうなんだ。あれが屋台つてやつか」

一人の男性が鉄で囲まれた箱の上に何かの肉を串に差し焼いているのが見えた。

「そうですね、あれはアルドルという肉を串に刺して火の精霊石を使って炙っているんですよ」

「へーそうなんだ。ヘネシーさん少し待っててもらえますか？」

「すみません、串を5本ほどもらえますか？」

「はい、お待ち」

銀貨を5枚支払うと、ヘネシーの元に戻った。

「お待たせ、これどうぞ。」

「え？いいんですか？」

「うん、いいよ。仕事の時間を削ってくれてまで案内してくれてるんだもんな。それに朝食食べてなかったしおなかペコペコだったんだよ。」

「ふふふ、勇人さんは面白いですね。」

「なんだが、こうしているとカップルですよ。そんな事をヘネシーは思っていた。」

ヘネシーに教えてもらった内容は、北は道具屋・東は武器・防具屋・

西は住宅街が広がっていた。

案内が終わった頃にはすでに夕方を過ぎており、あたりは夕日に包まれていた。

「ヘネシーさん、そろそろ遅いし解散しますか？」

「そういえば、勇人さん。せっかくこの町にいるんですからこの町の特産料理食べてみませんか？」

特産か・・・いいかもしれないな。御昼に食べた串も焼き鳥みたいでおいしかったし、宿屋のやつって味と量が微妙なんだよな

「いいよ、いこう。」

「はい！それじゃこっちです」

ヘネシーに案内されたのは住宅街であり、一軒の家が目の前にあった。

「あれ？料理屋にいくんじゃ？」

と優人は頭の中でクエッションマークを作っていた。

「実は私、家庭的な料理得意なんですよ、ですからご馳走しますよ。」

「いや、でも女性の家に入るのはちょっと・・・」

「大丈夫です。お母さんとお父さんも一緒に住んでいますので」

「そつかならご馳走になろうかな？」
なら良いかなと軽い気持ちで受けてしまう。

家に入りリビングに通され、料理を作ってきますねーと言いながら奥のキッチンへエプロンをつけてヘネシーは消えていった。それを見ながらリビングに置いてあつた新聞を見ていた。

しばらくするとヘネシーが料理をたくさん作って持ってきてくれた。料理を並べ終わってからヘネシーが勇人を見ながら薦めてくる。

「どうぞ、勇人さん。」

「ああ、ありがとう。」

勇人もそついいながら料理を平らげていく。

「これもどうぞ」

とヘネシーは勇人にお酒を勧める。

「ヘネシーさんはすごい料理が上手なんですなー」
ホクホク顔で食事をしながら、ルーゼン特産の口当たりは軽い。実は意中の男を眠らせて落すアルコール度89%のお酒を飲んでいく。

料理の味と的確なヘネシーの話もあつて勇人が酔いつぶれるまで時間はかからなかつたのである。

実はこの家にはヘネシーしか住んで居らず作戦どおりであつたのだ。

勇人をベットまで魔法で運んでから、服を脱がして、猫のようにペ

ロツと自分の唇を舐めてへネシーも裸になって勇人を寝かせたベツトの中に入って行った。

冒険者ランクとハニートラップ（後書き）

次回は、あわわな・・・

勇人の女難

ベッドの上でヘネシーは裸になって寝ている勇人の上に膝たちしていた。

勇人は着痩せするタイプらしく、脱がしてみると全身引き締まった体つきをしており、欲情をとつてもそそられる。ヘネシーが人差し指を勇人の胸元から割れた腹筋にかけてつつーとなぞると勇人の体がピクツと寝てても反応してくれた。

ヘネシーはそれを見ながら、自分自身がすでに体が発情しておりいつでも受け入れられるというのを理解した。

そして、勇人の堅くなっているモノを自分の大事な部分へ向い入れようとした途端、部屋の扉が吹き飛んだ。

慌てて、扉の方を見ると、怒り心頭のアイネスと感情が壊れたような眼した愛奈がいた。

「ヘネシー、あんた私の勇人に何しようとしてるのよ？」

「ヘネシーさん、勇人に手を出したらコロスヨ？」

でも、ここまで来たら後には引けない。あとは腰を落として向い入れば既成事実は作れる。

そう思い、膝の力を抜いた瞬間、高速で移動してきたアイネスに壁まで吹飛ばされてきゅうーと言いながら意識を失った。

翌日、いつの間にか寝てしまっていたのか服を来た勇人はベットから降りて二日酔いの頭でリビングまで歩いて行った。

リビングの扉を開けると、縄でぐるぐる巻きにされたヘネシーとその上に座ってるアイネスそしてリビングの椅子に座ってお茶を飲んでる愛奈がいた。

それを見たとき、勇人の武人たる魂がここからすぐに離脱しろさもないと死ぬぞ！とアラームを投げかけてきた。

だが、愛奈とアイネスにすっごいいい笑顔で見られた瞬間、あー短い人生だったなと逃避を諦めた。

ヘネシーの家のリビングでは、ヘネシーと勇人が正座させられていた。

「それで、アイネスさんと愛奈はなんでここにいるんですか？」

と勇人は事の重大さを理解せずに聞く

アイネスは勇人のその言葉を聴き

「そうね、勇人はよく分かってないみたいだし先に説明しましょうか？」

アイネスから説明された内容は、昨日、愛奈とアイネスが口論をしたあと勇人が離脱しそれに気づいたのが1時間後だった事、そしてギルド内を探しても勇人が見つからない。

それと同時に、ヘネシーも早退をしている事から何らかの関係があると思われた。

職員からの話を聞く限りだと町の案内についていくという話であったが、女の感でそれだけじゃないと二人は思い団結して探していた。夕方になっても宿に戻ってない事からもしかしたら、勇人目当てであの発情猫がお持ち帰りしたんじゃないのかと、発情猫の家に押し入ってみたら案の定だったわけだが・

勇人はそこまで聞いて、ヘネシー「発情猫って・・・と違った感想を抱きながらも自分の身の上に降りかかった事に対して不注意な行動からこの事態を招いたと反省していた。

「すみません、アイネスさん、愛奈。俺の不注意で二人には迷惑をかけた。俺がきちんとしてればよかったのに本当にすみませんでした。ヘネシーさんも俺が不注意な態度を取ったからとばつちりを受けた形になって悪かったです。」

「アイネスさん、愛奈。今回の事は俺が全部悪かった。だからヘネ

シーさんを許してくれないか？」

勇人的には自分の不注意が招いた事だから、男らしく責任を取ったつもりでヘネシーの擁護もしたわけだが、勇人が意中なアイネスと愛奈にとっては、好きな男が他の女を擁護するのは面白くないわけ・・・

「勇人、今回の事はこの発情猫が全部悪いのよ！だからあんたは悪くないわ」

「そうよ、ヘネシー。ギルドマスターを置いて先に手を出そうとするとはどういう事かわかるかしら？」

「何よ！人の家に勝手に入りこんで来て置いて、二人して何言ってるのよ！勇人は私と結婚するのよ！！さっさと私の家から出ていってよ！」

「ヘネシー残念ながら、ギルドから職員の家で問題が起きたとして捜査令状が降りてるのよ？」

そう言つて、ヘネシーに捜査令状を見せ付ける。

そこにはアイネスの印鑑が押しあつた。

「なによ！職権乱用じゃないの！？こんな事までして信じられないわ。だからいき遅れるのよ！ひっ！」

アイネスが冷たい目線でヘネシーに眼を向けていた。腰から剣も抜いている。抜刀の速度が尋常ではないほど速く勇人の眼でも見れなかった

女ってコエー！。

というかなんでこんな修羅場になっちゃてるの？誰か教えてよ

勇人が疑問に思ってる事を愛奈は態度から読み取り

「ゆーと、少し静かにしてヨウカ？」

「は、はひっ！」

正座のまま、勇人は背筋を伸ばした。

その説教は夜になるまで続けられた。

ヘネシーのその後

すでに日が沈み暗くなった道を勇人と愛奈とアイネスは宿をとつてある南通りまで歩いていった。

「で、なんでアイネスまで着いてきてるの？」

「別にいいじゃないの？同じ道だし」

とアイネスは勇人の手を取りその腕を自分の豊満な胸の間に挟もうとしようとするが愛奈が間に滑り込むようにして邪魔をした。

アイネスがムツとして

「本当に！独占欲丸出しな女よね」

言つと、愛奈も負けずに、

「あら？どつちがそうなのかな？」

と言いながらお互いの目の間をバチバチと言つ擬音が出るほどの勢いでお互いが睨む。

それを見ながら、勇人はアイネスも愛奈も仲がいいよなと思つていた。

「そつといえば、ヘネシーさんはどうしたんだろ？アイネスに連れられて戻ってきたヘネシーさんは目を虚ろにしてたような・・・」

慌てて勇人が聞いて来た事に対してアイネスが言葉を返す。

「そんな事ないわよ。まったく勇人ったら。」

ニツコリと笑って話してくる。その笑みには聞くなという雰囲気が入められており突っ込んだらいけないんだろうなと勇人は思った。

ちなみに、アイネスが何をしていたかと言うとヘネシーを丸太に括りつけて肌に触れる1m手前に敵を想定して剣を抜刀の状態から振り回していただけのだが、一般人がそんな事をされてら、しばらく放心状態になるのも致し方ないというかなんというか・

さすがにそれを聞いた愛奈も引いてしまった。

「そういえば、アイネスさん。あの竜を倒した報奨金って決まったんですか？」

「あ、ええ、そうね」

アイネスはヘネシーにしてた時の事を勇人にばれたかと思い、一瞬どもってしまっていたが・

「討伐で金貨16000枚 部位換金で19000枚 合計で35000枚ね。」

その金額に勇人と愛奈は立ち止まってアイネスを見てしまった。

「35000枚ですか？」

日本円換算だと3億5千万円である。勇人と愛奈がおどろくにも仕

方ないだろう。

「ええ、そうよ、もう勇人のギルド口座に振り込んであるから自由に引き出し出来るわよ。」

「ゆーと！すごいよ！」

愛奈は勇人に思わず抱きついた。

「これで私達の家が手に入るね」

「愛奈と俺の家が別々に建てられるな・・・よかったな。男と一緒に住むのは何かと問題だっただろう？」

それを聞くと、愛奈はぶすつとして誰にも聞えないように、「ゆーとのどんかん」と呟いていた。

虎の獣人であるアイネスには二人の話は丸聞えであり、アイネスもまだまだ自分が勇人を入れることが出来ると確信した。

敵はあの発情猫だけか・・・と

宿屋前につく手前にアイネスと勇人達は分かれ、そのまま宿屋に向った。

「ねえ？ゆーと、明日は二人で不動産廻ろうね？」

そっぴいなながら愛奈は金色に変化した瞳で勇人を覗き込むようにして見た。

勇人も少し照れながら

「ああ、わかった。明日な」

そういい二人はそれぞれの部屋に入っていった。

捉えられた愛奈

翌日、勇人と愛奈は1Fで食事を取りながらこれからの話をしていった。

「ね、ゆーとが居ない間に良い物件見繕っておいたから後で見にいこう」

「そうですね。」

勇人としては女性である愛奈の事を考えて、一人一軒づつ家を購入する予定だった。

ハムエッグとパンとスープと言う在り来たりの朝食と食べたあと、大通りから町の中心にある商工ギルドに歩いていたが

「ねえ？ゆーと、何かおかしくない？」

勇人は愛奈の言葉を聞きながら通りを見渡すと、この時間ならば多くの出店が並んでる所に多くの冒険者や傭兵が立っているのに気がついた。

「愛奈先輩、一回、冒険者ギルドにいきましょう」

ギルドに向ってる途中、女はいたか？などの掛け合いが至る所から耳に入ってくる。

二人はギルドに入るとカウンターに座っていた、ヘネシーに近づき、町の様子がおかしい理由を聞く。

そうすると、ヘネシーに案内されて、ギルドマスターのアイネスの部屋に通された。

アイネスは入ってきた勇人と愛奈を見ると厳しい顔つきで二人に席を勧めてアイネス自身も座った。

「勇人、愛奈。町の様子は見てきたか？」

「はい、それで何か女性を探してるようでしたが。」

「そうか、実は、アーバント侯爵より数ヶ月前から、各地で人や獣人を襲っている黒竜族の討伐部隊が音信不通になったと報告が来ていて、それを調べるようにギルドに依頼が出ていたのだが、探した結果、遺留品などが黒竜族の縄張りから見つかった為、その結果を侯爵に告げた所、危険視された黒竜族の討伐をアーバント侯爵自ら陣頭にたって指揮しているのだ。それで今、この町にいる黒竜族を全員差し出すように命令をギルドに来ている。いまギルドはギルドメンバーと傭兵を総動員して黒竜族を見つけて拘束してるところだ」

「そんな！」

愛奈は両手を顔の前に持っていき、勇人は拳をテーブルに叩きつけた。

「アイネスさん、まってください。黒竜族がそんな事を自分達からするわらないじゃないですか。それともアイネスさんは黒竜族がそんな事をすると思ってるんですか？ギルドはそんな命令を聞くんですか？そんな人権無視な事をする集団ではないとヘネシーさんは言うてましたよ。」

「すまない、勇人。他の国のギルドなら違うかも知れないが、ここは自治区と言えどもイスメラル帝国という国の植民地なのだ。命令に従わなければ町ごと焼き払われてしまう。だから今回の事にお前は係わらないで、事態が落ち着くまで宿で静かにしてほしい。」

それでも納得がいかない勇人はアイネスに詰め寄ろうとするが、アイネスが拳に爪を立てて、泣きそうになるのを堪えてるのを見て、シヨックを受けてる愛奈を連れてギルドから出た。

今回の事で、ギルドに対する勇人の信頼は地に落ちていた。勇人は念の為に多少はお金はかかるが、ギルド銀行ではなく大陸全土で情報を共有している商業組合の銀行の口座を開設してそこに全てのお金を移動しておいた。

宿の帰り道

「ね、ゆーと。黒竜族の皆どうなっちゃうのかな？」

「侯爵が動いて、ここまで大規模にやってるんだ。只じゃすまないな」

「そつだよね・・・」

愛奈が下を向いて歩いていたら、勇人は愛奈がぶつからない様に腕を引っ張っていた。

宿までの近道をする為、裏路地に入りしばらく歩くと、ボスツと軽い音を立てて誰かがぶつかってきた。

ぶつかってきた人物を見ると黒竜族の村にいたりリルという女性で

あつた。

リリルは勇人の顔を見ると、勇人の背後に隠れて、助けてと息の上
がった声で言つて来た。しばらくすると冒険者風の男が6人ほど前
方から走つてきた。

「お、おい。あいつつて」

「ああ、タクニティカ災害殺しの勇人だな」

周りの冒険者もそれを聞いて怖気づく。

「勇人殿、悪いがその女をこつちに引き渡してくれないか？早く町
に居る黒竜族をこの町を囲んでる侯爵軍に引き渡さないとこの町が
焼かれてしまうんだ」

「なあ？侯爵軍つてどのくらい来てるんだ？」

「2000人近いらしい」

「そうか、わかった。そしたらこの女は俺がギルドまで連れていく
からお前達は手を引いてくれ。」

勇人はそう言うつと懐から金貨100枚を出して男達に渡した。

「報酬つてこのくらいなのか？」

「いやこの3分の1くらいだがいいのか？」

「気にするなよ、俺もこの町は気にいつてるからな。お前達もその

「ままがんばってくれ」

「悪いな、勇者。それじゃ任せた。」

冒険者達はそのまま勇者にリリルを預けて他の黒竜族を探しに離れて行った。

「勇者さん、私、殺されちゃうんですか？」

リリルが怯えた顔色をして、勇者に話しかけてくる。愛奈も勇者の次の言葉を待っている。

「とりあえず、宿に戻ってこれからの話しをしよう。」

リリルを連れて、愛奈と勇者は宿の裏手から入り、誰にも見つからずに勇者の部屋に集まる事が出来た。

「それで、ゆーと。どうするの？」

勇者は悩んでいた。先ほどはなんとなくリリルを助けてしまったが実際、この町を囲っているとなるとリリルを連れて町から逃げ出すのは不可能だからだ。

「勇者さん、私やっぱり迷惑ですよね？ごめんなさい、出ていきま
す。」

リリルはそう言うと部屋から出ていく。
部屋には愛奈と勇者だけ残る。

「勇人！」

パシーンと部屋に音が響き渡った。

勇人は自分が愛奈に打たれた事に気がついた。

「っ！もう、何考えてるのよ！女の子が勇人に助けを求めているんだよ。それを何とかしてあげるのが男でしょう？」

「先輩！相手は国の権力者なんだ！今、来てる兵士を倒してもまた更に増強して攻めてくるのは分かりきってる！だったら余計な行動は慎むべきだつて分からないのか？」

「分かるけど、集落やこの町にも戦えない女子供達がたくさんいるんだよ？それを勇人は見殺しにするの？」

「仕方ないだろ！ここはそういう世界なんだ。個人で出来る事には限りがあるんだ、出来ない事は出来ないって割り切らないと生きていけないぞ」

「勇人は良い人だと思ってたけど、そんな薄情な人だったなんて知らなかった！もういい！私一人でなんとかして見せるもん」

ボタン・・・部屋のドアが力任せに閉められた。

「つたくなんなんだよ。一人でなんとか出来るくらいなら戦争なんか起きやしないのに、ベットに寝転がって勇人は天井を見上げた。

愛奈は、宿を出ると急いで裏路地を走っていき、リリルを見つけた。

「リリル、ダメだよこんな所にいたら。」

「愛奈さん。」

「私の部屋に行こう、あそこなら大丈夫だから、一人くらいいなくても分からないと思うからしばらく隠れて帝国の兵士がいなくなるまで様子をみましょう。」

「ごめんなさい」

「謝らなくていいから行きましょう」

二人が宿に向けて歩き出した所で5人ほどの傭兵達が左右の道を塞いでいた。

「おい、こいつ黒竜族だぞ?」

「ああ、もう一人は人間だけどやけに親しそうに話していたな」

「二人とも捕まえて傭兵ギルドに差し出すか?」

男達が左右から近づいてリリルに手を伸ばしてくる。

「リリル危ない!」

手を伸ばしてた男に愛奈が体ごとぶつかると、その衝撃で男がよろけて転ぶ。

「このアマー！」

身長が2m近い大男が愛奈の顔を殴り、愛奈は口から血を吐いて倒れた。

「リリル、逃げて。」

大男の足を両腕で捕まえながら、絶え絶えに逃げるように何度も愛奈がリリルに言う。

丁度、愛奈が転ばした男と愛奈が必死に足を両腕で押さえてる為、宿の方向への道は空いていた。

リリルは、勇人に助けを求める為に必死に宿へ走り出した。

それを見た、傭兵達は後を追おうとした所、愛奈が立ち上がって道を塞いだ為、通れなくなってしまう姿を見失ってしまった。

「こいつ！」

傭兵が怒りに任せて、愛奈を殴りつけた。

糸の切れた人形のように地面に叩きつけられた。右肩から激しい鈍痛が響いてきて腕が動かせない。

左手を使って立とうとすると、手の平に傭兵が吐いていたアイアンブーツで力いっぱい踏まれた。

ボキボキツという嫌な音がし、自分の指が本来曲がらない方向に曲がっているのを視界に捉えた。

愛奈は口の中を既に切っている為、息をするだけで激痛が体中を苛んでいた。

男達は愛奈の髪の毛を鷲掴みにするとそのまま傭兵ギルドまで引き摺って行った。

愛奈奪還

俺が宿のベットの上で寝てると、扉を開けて真っ青な顔をした、リリルが入ってきた。

「どうしたんだ？」

俺がベットから体を起してリリルに話しかけると、愛奈がリリルを逃がす為に身代わりになった事を聞いた。その際に傭兵に顔を殴られたという事も

「ったく！」

リリルに襲撃があった場所と傭兵が向いそうな場所を聞き、宿の階段を使わずに窓から飛び降りる。

私はそれを見ながら、こんな時で不謹慎だったけど、すぐに助けに向ってくれる男性がいる愛奈さんに嫉妬していた。

勇人は、リリルに教えてもらった場所。傭兵と愛奈がいた場所にくると周辺を見渡した。

地面には、血が付着して長い黒髪が数十本散乱していた。

俺は落ちていた、髪の毛を拾うと長さから見ても女性のモノだというのが分かった。

そしてその毛に血が固まってこびりついていた。

そのまま、傭兵が向いそうな傭兵ギルドに向かい町の中心部に走っ

ていった。

ガラム達は傭兵ギルドの扉を開けて、髪をもったまま引き摺ってきた愛奈を、黒竜族が纏めて放り込まれている部屋へそのまま放り込んだ。

傭兵ギルドの受付の担当には、黒竜族と内通していた女という事で報奨金をもらい新しく黒竜族を探す為にギルドの入り口から出ようとした所で勇人が中に入ってきた。

勇人は傭兵ギルドの受付の男性に、女性が連れてこられたか聞いた。受付の担当者は、入り口にいる傭兵達が内通者という事で捕まえて来た女がいると教えてくれた。

傭兵達は受付担当者の声が聞えた為、優男と言った感じの男を見た途端、

「なんだ、あの女の仲間か？」

「っ事は内通者か？」

5人の傭兵達が勇人を捕まえて報奨金をもらおうと勇人を囲んだ。それを見ていた、傭兵ギルドの職人は顔を真っ青にしていた。

勇人の顔に見覚えがあったからだ。勇人が殺して手に入れたSSSランクのモンスターの取り扱いには冒険者ギルドだけは難しかった為、アイネスが傭兵ギルドにも手数料を払い手伝いを依頼していた

からであった。

SSSランクのモンスターを引つ張った時に傭兵ギルドの職員も数人、勇人と一緒にいたのだ。

「まで！ガラム、こんな所でゴタゴタを起すな」

傭兵ギルドの責任者のステイードは、戦いを止めようと声をかけた。ガラム達は決して弱くはないが、ギルドの中で血流沙汰はやめてほしい。

「うるせえ、ステイード。表でやるから文句言つなよ」

「おい、お前、表で待ってるから逃げるんじゃないやねえぞ？」

そういうと、傭兵ギルドの入り口から出て、入り口前の通りを占領したようだった。

「すみません、ステイードさん。貴方がここの責任者という事ではないのでしょうか？」

「はい、そうですが」

「連れを帰してもらえますよね？」

ステイードは勇人が丁寧な口調で拒否権はないぞ？という話方を聞いて内心焦っていた。

一度、内通者という事で受付が傭兵から受け取ってしまったのだ。ここで、返すようなら一介の冒険者に脅されて返したと言われてしまう。

それは傭兵ギルドの誤認と言う事を認めてしまう事になり、世間か

らの信用も貶めてしまつ。

「いえ、返せません」

「なぜですか？」

「ガラムさん達より、愛奈さんは黒竜族の内通者という事で話は聞いています。そしてその現場も複数の人が目撃しています。ですから返す事はできません」

「そうですか。」

勇人は話してる間にも風を使い、愛奈が居る場所を調べていた。

はあ、まったくだから静観しておけてあれだけ言ったのにその結果がこれかよ。

なんで学習しないんだ？

そう考えながらも、傭兵ギルドの中を歩いていき、職員が止めるのも聞かず愛奈が押し込められてる部屋のドアを開けた。

部屋の中には、黒竜族と思われる女性が6人 子供が3人 そしてうつ伏せに倒れている愛奈がいた。

「先輩！」

近づき、抱き抱え顔を自分の方に向けて傷を確認していく。

「っ・・・!？」

男達に殴られた頬は紫色に腫れ上がっており頬骨が折れてるのか開

ききつたまま閉じきれない唇の端から血が流れていた。
右肩も服の上から見て分かるように歪んでおり、折れてるのが分かる。左手の甲には硬い靴で踏まれたのか靴の足跡と数本の砕けたピンク色の骨が飛び出していた。

ブチッ．．．．．何か切れる音が勇人の中でした。

「スディードさん、これをしたのはあの傭兵達ですか？」

スディードも勇人を部屋に入らせないように追ってきた来たが、勇人に抱えられてる連れの女性があまりに酷い暴行を受けていたのを見て、唾然としてしまっていた。
まさか、ここまでするとは。

「勇人さん、受付の話しではそのようですが、その女性の身柄は今、私達傭兵ギルドのモノです。ですからそれを持っていくという事は傭兵ギルドの管轄を犯す行為になります。」

モノ？もっていく？お前ら何を言ってるんだ？

勇人はその話を一切、聞く耳をもたずに愛奈を連れてギルドの入り口に向けて歩いていく。捕まっていた黒竜族も勇人の姿を集落で見たことがあるのか後ろに着いて行く。

「勇人さん、そのまま行けばあなたは大陸中の傭兵ギルドを敵に回す事になる。傭兵ギルドだけじゃない、冒険者ギルドも敵に回す事になる。この意味分かってるか？」

その言葉に勇人は足を止めてスディードを見返した。

そして一言

「それが、どうかしたのか？」

その一言で、傭兵ギルドの空気が殺気により氷つく。

そのまま、勇人はギルドから出ていく。

だれも、受けた殺気により追える者、否。止めたら殺されてると分かっている状況下で動ける者などいなかった。

ガラムは、自分達が捕まえた女を抱き抱えて出てくる勇人を見て、怪訝な表情をしていた。
なんで、女をギルドが帰したんだと

勇人はガラム達の姿を視界におさめると愛奈をそつと地面に置きガラム達の元へ歩いていく。

そして困惑していたガラムの首をそのまま手刀で刈った。

空中で回転しながらガラムの首が地面に落ちると同時に胴体から血が噴出した。

残りの4人はすぐさま反撃する為に剣を抜こうとするが、一人が勇人が放った衝撃波を受けて、体が爆砕する。

爆砕した肉片が近くにいた男に頭上から降りかかった。

理解しきれないその男は、胸部を殴られ後方へ直進に吹き飛び、傭兵ギルドの壁を打ち破り絶命した。

傭兵ギルドの職員達は飛び込んできたガラム傭兵団の一人が絶命したのを見て、悲鳴を上げた。

その悲鳴を聞いて、呆然としていた男達はハツとして剣を抜いて勇人に斬りかかる。

勇人は流れるように移動し上段から斬りかかってきた斬撃を剣の刃の無い刀身部分に左手の甲をあてそのまま円を描き軌道を逸らしながら右足を一步踏み込み拳をすい臓の部分に打ち込む。

打ち込まれた衝撃波により男は体を一度、震わせてから息絶えた。残りの男が後ろから斬りかかってくるが、勇人は打ち込んだ男を盾にしながらそのまま男を斬りかかってきた者へ押し付けてバランスを崩し地面に倒してから喉元に向けて、足を振り下ろし仕留めた。

その戦いを周辺で見っていた、冒険者と傭兵ギルドの関係者達はあまりに一方的な戦闘を見た。

そして、その場から黒竜族と愛奈を連れて去っていく勇人を追う者は誰もいなかった。

宿に戻ってから、勇人は愛奈をベッドに寝かせた後、リリルが愛奈の怪我を見てくれていた。

ついてきた黒竜族の女性と子供は勇人の部屋で休んでいた。

表を見ると、通りに百人近い冒険者と傭兵、そしてアイネスが視界に入った。

アイネス撃破

アイネスは宿屋の表口から出てきた勇人を見て、普段と違う感じに心の中がざわめいていくのを感じた。

「勇人、冒険者ギルドのギルドマスターとして傭兵ギルドの死傷の件は、愛奈が傷害を受けた事から傭兵ギルドマスターと話をしてその話は痛み分けという事で話は終わりました。」

俺はアイネスからその話を聞きながらも冒険者と傭兵の数を風の精霊を使い正確に把握していく。宿屋の窓からは俺についてきた黒竜族の人達が俺とアイネス達の反応を見ている。俺の判断一つで自分達の今後が決まるのだから仕方ない事だろうが、弓矢、魔法の攻撃も考えてくれると窓から外を見るのはやめてほしい。

「それで、どうしろと?」

私は、今の勇人の回答で、冷静に振舞っているように見えるけど内心では怒ってるのは理解した。それでも、ギルドマスターである以上きちんと言わないといけないのは分かっている。

「ギルドマスター権限として、今、匿っている黒竜族全員の身柄と通じてるとされている愛奈さんの身柄を冒険者ギルドで一時的に確保します。」

確保か、くだらないな。

自分達の身の安全を守る為だけに、犠牲を強いる。

そうだな、俺も大して変わらない、この町の連中と俺は大差はない。それでも、あの子と似ている先輩を渡すわけには行かない。

「断る」

な！周りの冒険者や傭兵達がその返答にざわめく。

それはそうだろう、100人以上の人数を目の前にして、要求を跳ね除ける事がどういう事なのか普通ならば分かるからだ。

実力行使に移ってしまえば、多勢に無勢。

いくら実力者と言えど、それは変わらない。

一人の実力では多勢には絶対に勝つことは出来ない、それも守る者がいる場合は特に。

逃げる事が許されないからだ。

それでも．．．アイネスは心の中でこういう返答がくるのを半ば理解していた。

同じ女だからこそ分かる。

勇人は愛奈だけは違う目で見ていた。

恋とか保護者とかそういう目ではない。

分かりやすく言えば、もう二度と大事な者を失いたくない。

そんな目で見ていた。

だからこそ、そこに恋はないと思い、私とヘネシーはアタックしていた。

「アイネスさん、本来冒険者は弱いものを守る者と聞いた。それがこんなに大勢で来て、女子供を力づくで連れて行って貴族に差し出すってのはどういう事なんだ？趣旨変えでもしたのか？」

「悪いな、勇人。私達はこの町を守らないといけない。奇麗事だけでは町は守れない、その為には多少の犠牲も必要なのは分かってくれ」

「分からないな、お前達は自分の家族を生贄にしないと町を守れないと言われたら家族を親しい人を生贄に出来るのか？」

その言葉に通りの冒険者と傭兵達は答える術を持っていない。

「貴族や上の人間に言われた事だけを実行するのは楽だと思っ。それでいざ自分がそういう立場に置かれたときお前達はとうするんだ？理不尽な要求に対して否！を言えないようでは、冒険者としてどうなんだ？」

勇人の言ってる事は地球の倫理観を持ち出してるに過ぎない。それでも、対象が自分達の大切な者になったときにそれを差し出せるのかと言えば答えは誰でも否であろう。

だからこそ、いま先ほどまで喧騒のあった通りはシン．．．と静まりかえっている。

「勇人、それでも私はギルドマスターなんだ！町をまず高い確率で守らないといけない。だからお前の意見がどんなに正当性があってもそれに頷くことはできない。話し合いは終わりだ、勇人、この町のギルドマスターとしてお前の冒険者資格と取り上げさせてもらう。そして、愛奈と黒竜族を確保させてもらう！！」

俺は、それを聞きながら予想通りかと思っていた。それと同時にアイネスを倒してこの傭兵と冒険者達に歯止めをかけようと考えた。

私はいきなり、噴出した勇人の闘気に反応して臨戦態勢を無意識に取ってしまった。

それほどまでに、勇人から感じる闘気は今までとは桁違いだった。私は、体中に刻み込んだある刺青を発動させ肉体強化、耐久強化、

武器強化、防具強化を行いつても闘えるように態勢を整えた。

俺は歯止めをする為にアイネスに圧倒的に勝たなければいけない、
存在意識下を《亡霊》^{ファントム}を使い、通常の数十倍まで力を引き上げてい
く。

私は、勇人から噴出している闘気に晒されてじわじわ体力と精神が
磨り減っていくのを感じた。周りのAランク以下の傭兵や冒険者達
は立っていることも出来ず地面に恐怖の顔をして座っている。

勇人が一歩踏み出した所で、私は無意識的に危機を感じていたのか
誘われるように攻撃を仕掛けてしまった。

勇人は一歩踏み出した所でアイネスが上段から振りかぶってきた剣
をグローブで逸らしながら一歩踏み込みカウンターの要領でアイネ
スの胸部に攻撃を打ち込もうとするが、アイネスもSS冒険者であ
る。それに反応し左手に持つバックラーで勇人の攻撃軌道線上に盾
を構える。勇人はそれに構わず、バックラー目掛けて、右拳を打ち
込む。

《九頭・右竜徹陣》

通しを極限まで極めた10口径マグナムの超える威力がアイネスを
襲った。

アイネスは体がバラバラになりそうな衝撃を受けながら反対側の建
物へ地面と平行に吹飛ばされる。

その間にアイネスの持つ鉄製のバックラーが粉々に碎け、余波で左
手が肩から骨折し反動で後ろに弾かれる。

同時にアイネスは通りの反対側の壁に激突し纏っていた鉄製の鎧が
碎け散り、血を吐きながら通りに顔から倒れこんだ。

その時間はわずか1秒も満たない。が……………

最強の一角SSランクの冒険者が倒された事実は、アイネスの指揮下の元集まっていた冒険者と傭兵達へ死の宣告を与えるに相応しかった。

勇人は、アイネスを倒しただけであって殺してはいなかった。

それでも……………

勇人は傭兵と冒険者達に話しを持ちかけた。

それは通りにいる冒険者と傭兵達には想像もつかない内容であった。

侯爵殺害

勇人が冒険者と傭兵と話してから1時間が過ぎた。

ルアーゼン自由都市を丘の上から見下ろし、2千もの騎馬兵を指揮しているアーバント侯爵の元へ、騎士隊長ハーゼスが報告に来ていた。

「なに？男爵を殺害した首謀者を捕まえたと言うのか？」

アーバント侯爵の問いかけにハーゼスが、肯定の意志を現した。

「だが、男爵は1000名近い傭兵を連れていたのだろうか？」

たった一人でそれだけの人間を相手にすることなど常識的に不可能だ。だからこそ、アーバント侯爵はその報告に信憑性を見つけられずにいた。

「どうやら、その男はここ、ルーデン自治区にたった一人いるSSランク冒険者の《瞬虎》^{ブライスト}のアイネスを一瞬で再起不能にしたと言う事です。」

「なんだと？瞬虎を再起不能に？」

それに、ハーゼスは頷く。アーバントも大陸に10人もいないSSランクを単騎で屠る力があるならば、もしかしたらと考え始めてい

た。

「それと噂によるとその男、災害級の魔物と言われているタクティカルドラゴンですら一人で倒したと言う話があります。」

その報告にアーバントを含めて近くにいた側近も唾を飲んだ。

SSSランクの災害指定クラスはたった一匹で中規模の町程度ならば一夜で滅ぼす事が出来るからだ。

本当にそんな者がいるならば、この戦力でも対処しきれるかどうかなんか……

それよりも問題はそんな化け物をどうやって確保できたかが問題だ。

「ハーゼス、その冒険者ギルドの使いの者に詳しく話を聞きたい。」

アーバントの指示によりハーゼスは冒険者ギルドの使いの者という男をアーバントの前へ連れてきた。

アーバント侯爵の前に来た男は黒い髪に2m近い長身の男だった。男は体に密着してる服を着ていた。

「貴様が冒険者ギルドの使いの者だな？」

「はい」

男はそう答えた。

「噂で聞いたがアイネスが再起不能になった事、男爵を殺害した首謀者を捕まえたというのは本当か？」

「はい、本当です。ギルドマスターアイネスが再起不能になったの

は本当です。」

「男爵を殺害した首謀者を捕まえたと言っのは？」

その問いかけに男はニヤリと口元に笑みを浮かべる。

そして……

「侯爵様、男爵を殺害したのは首謀者イコール徒党ではございません。」

「なんだと？どついう事だ？」

アーバント侯爵は、先ほどから目の前の男から感じる威圧感に汗が噴出していた。こいつはなんだ？何者だ？

ハーゼスの方を見るとハーゼスも顔を真っ青にしていた。そして男は告げた。

男爵と兵士を殺した首謀者は自分自身であると！！！！

同時にアーバント侯爵は反応すら出来ずに首が吹き飛んだ。勇人が手刀で首を刈り取ったからだ。

一瞬の間が空き、事態を理解したハーゼスは待機していた騎馬兵へ命令を伝えた。

男を殺せと……

騎馬兵は勇人へ突っ込みランスを撃ちつける。全てがオレイカルコス製のグローブに軌道を曲げられそらされる。

そしてそのまま騎馬が横を通りすぎようとした所で馬の腹部へ勇人の拳が突き刺さり乗っていた騎馬兵ごと馬が吹き飛ぶ。吹き飛んだ馬が他の馬を巻き込み将棋倒しに倒れる。

それだけで体重をかけられた兵士と馬は圧死する。

そして、次々に遅いかかる騎馬兵のランスの突撃を逸らし同じ作業を繰り返す。

わずか数分で騎馬兵はその数を3割まで減らしていた。

ハーゼスはその戦いを悪夢を見るような眼差しで見っていた。

「き、貴様は、い．．．．．いったい．．．．．」

ハーゼスが勇人に何者か尋ねる。それに大して、勇人は顔のない男「ダーティフェイス」と伝えた。

ハーゼスは全滅に近い部隊の生き残りを連れて撤退していった。

勇人がわざと殺さなかったのは訳がある。

それは、自分が男爵を殺し、侯爵を殺したと言った目撃証言を帝国へ伝えさせる事により黒竜族への制裁を自分一人に向けさせる事だ。間違いなく一人でこれだけ殺せば、勇人が一人で男爵と兵士を殺せたというのが理解出来るだろう。

勇人は1時間前に、冒険者と兵士にこう説明していた。

おいはき 追剥まがいな事をしてきた兵士を殺してその指揮官も殺した所、それがどうやら男爵だったようだ．．．．

冒険者達と傭兵は勇人の实力を知っている者もあり、しかもたった今ギルドマスターすら一瞬で倒されたのを目撃したばかりの事もありそれを信じた。

それと同時に犯人が勇人ならば、黒竜族は濡れ衣を着せられていた事になる。

傭兵はともかく冒険者達は、仕方なく黒竜族と関係者を探していた

事もあり勇人一人の犠牲で物事が片付くならばと生贄のように勇人を送り出した。

死ねばそれまで、生きてても、勇人はお尋ね物になり、愛奈を含め黒竜族は無罪放免という形になるだろう。

勇人はここに来る前に、リリルに愛奈の意識が戻ったら渡してくれと銀行ギルドの手形が入った袋を渡していた。それは、災害級ドラゴンタクティカルを倒した報酬がそのまま入っており、この世界で普通に生活していく分には申し分ない金額だろう。

そして、リリルには愛奈へ絶対に追っては来ないようにと託たくを伝え、町に入らずに町に進む方向とは別の道を歩き、町から離れて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7756t/>

霧の先は異世界！

2011年8月8日09時26分発行